県営ほ場整備事業（宝立第２地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

珠洲市

宿神社前遺跡

２００９

石　川　県　教　育　委　員　会

（財）石川県埋蔵文化財センター

宿神社前遺跡
やどじんじゃまえ

２００９

石　川　県　教　育　委　員　会

（財）石川県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は宿神社前遺跡の発掘調査報告書である。
2　遺跡の所在地は珠洲市宝立町春日野地内である。
3　調査原因は県営ほ場整備事業（宝立第２地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
4　調査は（財）石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成18（2006）年度から平成20（2008）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
5　調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤課と、石川県教育委員会が文化庁の補助を受けて負担した。
6　現地調査は平成18年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。
　期　間　平成18年５月10日～同年６月12日
　面　積　420㎡
　担当課　調査部調査第２課
　担当者　立原秀明（主査）、谷内明央（主事）
7　出土品整理は平成19（2007）年度に実施し、企画部整理課が担当した。
8　報告書刊行は平成20年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆・編集は谷内明央（国関係調査グループ主任主事）が行った。
9　調査には下記の機関・個人の協力を得た。（五十音順、敬称略）
石川県農林水産部農業基盤課、奥能登農林総合事務所、珠洲市教育委員会
10　調査に関する記録と出土品は（財）石川県埋蔵文化財センターで保管している。
11　本書についての凡例は下記のとおりである。
(1) 遺構図の方位は磁北である。
(2) 水平基準は海抜高であり、Ｔ．Ｐ．（東京湾平均海面標高）による。
(3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3

第１節　地理的環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調 査 の 概 要 …… 7

第４章　遺　　構 …… 9

第５章　遺　　物 …… 17

第６章　ま　と　め …… 23

挿図目次

第1図　調査区位置図 …… 2
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4
第3図　遺構配置図 …… 8
第4図　A区遺構実測図 …… 10
第5図　B区遺構実測図 …… 12
第6図　C区遺構実測図① …… 14
第7図　C区遺構実測図② …… 15
第8図　出土遺物実測図① …… 20
第9図　出土遺物実測図② …… 21
第10図　出土遺物実測図③ …… 22

表 目 次

第1表　遺跡地名表 …… 5
第2表　土坑計測表 …… 16
第3表　ピット計測表 …… 16
第4表　遺物観察表 …… 19

図版目次

図版1　遺跡遠景、A区北西部完掘状況
図版2　A区：北西部完掘状況、南部完掘状況
図版3　A区：南部完掘状況、北西部遺構検出状況、SK1土層断面、南部西壁土層断面、南部東壁土層断面
図版4　B区：完掘状況、中央部完掘状況
図版5　B区：東部完掘状況、SD5、作業風景、SX3土層断面、東部鞍部土層断面
図版6　C区：北部完掘状況、SK6土層断面、SK7土層断面、SK10土層断面、SK9土層断面
図版7　C区：北部遺構検出状況、北部完掘状況、北部完掘状況、北部南壁土層断面、南部完掘状況
図版8　C区：南部遺構検出状況、SD7土層断面、南部東壁土層断面、SD7土層断面、南部完掘状況
図版9　出土遺物①：遺物写真1～22
図版10　出土遺物②：遺物写真23～44

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

石川県農林水産部農業基盤整備課（現農業基盤課。以下、「農林」）は農地の生産性を向上させるために農地・用排水路・農道などの整備を一体的に行う、ほ場整備事業を実施している。一方、石川県教育委員会文化財課（以下、「文化財課」）は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために事前に事業内容の照会を受けている。農林は珠洲市宝立町春日野地内にほ場整備事業を計画し、埋蔵文化財分布調査を文化財課に依頼した。重機による試掘の結果、調査区域の一部で新規の埋蔵文化財包蔵地、弥生・古墳時代の集落跡である宿神社前遺跡が発見された。文化財課は分布調査の結果を農林に回答し、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直しを要請した。双方協議の結果、工事の影響が遺跡に及ぶ箇所について発掘調査対象とすることで合意がなされた。

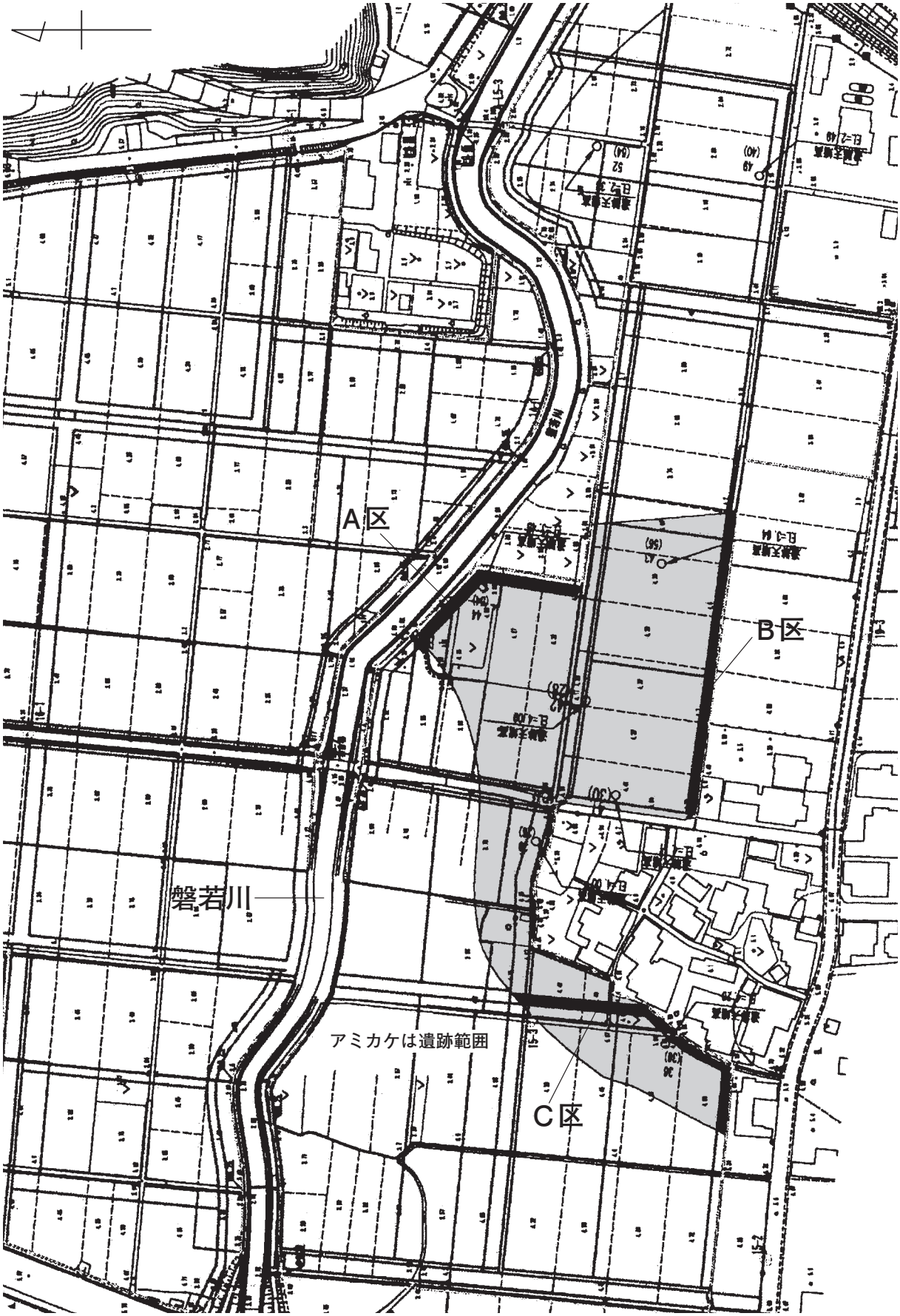
農林は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第２課が担当した。

第２節　調査の経過

現地調査　平成18年４月20日に農林・文化財課・埋文センターとの間で現地協議が行われ、調査区の範囲や調査着手時期などについて確認した。５月10・11日に表土除去を行い、12日から作業員が調査に参加した。磐若川に隣接したＡ区から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行った。18日からは現宿集落側のＢ区の調査に着手し、24日にはＡ・Ｂ区の調査を完了した。25日からはＣ区の表土除去を行い、29日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行った。６月２日にＣ区の実測を完了し、８日に器材を撤収した。12日に埋め戻しを行い、現地作業を完了した。

出土品整理　平成19年度に文化財課は埋文センターに出土品整理を委託し、４月10日から26日にかけて行った。整理内容は遺物の記名・分類・接合、実測・トレースと遺構実測図のトレースであり、企画部整理課が担当した。

報告書刊行　平成20年度に文化財課は埋文センターに報告書刊行を委託し、県関係調査グループが担当した。



第１図　調査区位置図（S=1/2,000）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

宿神社前遺跡は石川県珠洲市宝立町春日野地内に所在する。珠洲市は能登半島の北東端に位置し、北・東・南の三方は日本海に接し、西は輪島市と能登町に接する。地形は宝立山地、奥能登丘陵、海成段丘、沖積低地に大きく分かれる。宝立山地は宝立山（標高468ｍ）を最高峰とする山地で、奥能登丘陵がその東南側に広がり、海成段丘や沖積低地は市南部の海側に広く分布している。

宿神社前遺跡は市南部を西から東へ流れる磐若川によって開折された沖積低地に位置し、磐若川右岸に立地する。

第２節　歴史的環境

縄文時代　丘陵や台地に立地する遺跡が多く、主に土器や磨製石斧・打製石斧・石鏃などの石器が出土している。下鳥越ジリメキ遺跡（８）、後期の土器が出土した春日野堂平遺跡（９）、大畠桜井宮司開墾畑遺跡（10）、大畠遺跡（14）、中期～後期の土器が出土した宿神社前遺跡（19）、春日野正田畑遺跡（20）、金峰寺スンドン遺跡（23）、金峰寺カクナイ遺跡（24）、後期の土器が出土した金峰寺タケカワバタケ遺跡（26）、柏原西方寺遺跡（31）、中期の土器が出土した郷カマノマエ遺跡（35）、中期の土器が出土した柏原垣内高瀬畑遺跡（37）、鵜島ドウガクチＣ遺跡（54）、後期の土器やバナナ状の異形石器が出土した鵜島ドウガクチ遺跡（55）、鵜島ドウガクチＢ遺跡（56）、中期～晩期の土器や石鏃・石錐・楔・石錐・磨製石斧・打製石斧・石棒などの石器が出土した南黒丸遺跡（60）などがある。

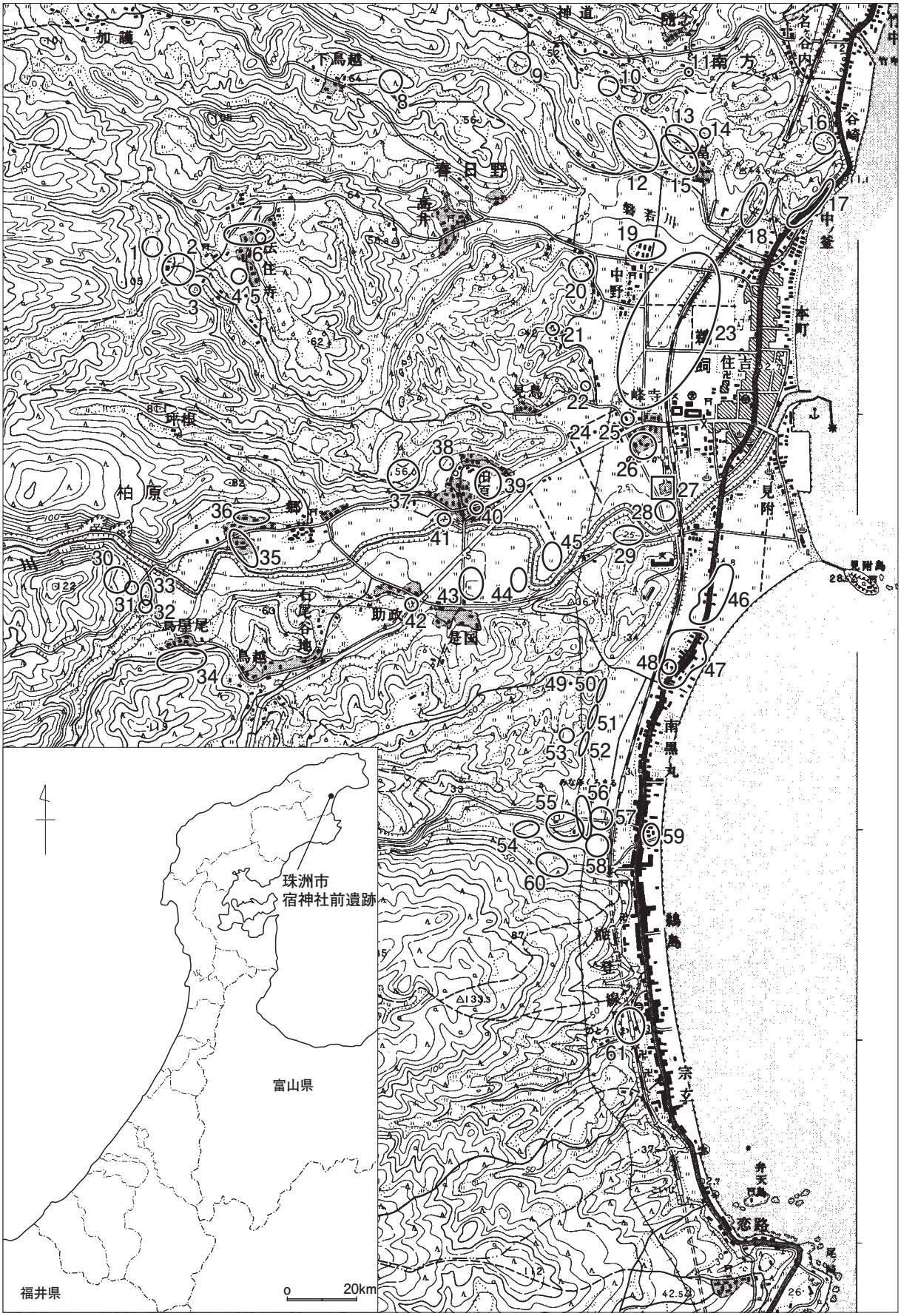
弥生時代　遺跡は少ない。中期の土器が出土した宿神社前遺跡や後期～終末期の土器が出土した南黒丸Ｂ遺跡（29）が確認されている。柏原ミツハシ遺跡（44）では終末期の竪穴住居が検出され、完形の皮袋形土器が２点出土しており、住居廃絶時の祭祀の可能性が指摘されている。

古墳時代　市域には200基以上の横穴墓が確認されている。市の指定文化財である須恵器子持長頸瓶が出土した谷崎横穴墓群（17）、南黒丸八幡Ｂ横穴墓群（49）、南黒丸八幡Ａ横穴墓群（51）、鵜島横穴墓群（52）はいずれも丘陵斜面に築かれている。

また、大畠南古墳群（12）では２基の古墳が調査されている。隅丸の方墳を意識したような楕円形を呈する墳丘であり、墳丘長径11～12ｍ、同短径８ｍを計測し、横穴式石室を持つ。１号墳からは須恵器や土師器、刀子や管玉が出土し、２号墳からは須恵器や土師器、耳飾や鉄鏃が出土している。大畠古墳群（15）では４基の古墳が知られている。１号墳は径12ｍの円墳で、横穴式石室が検出されており、須恵器や直刀、金環が出土している。４号墳は開墾により墳丘が削平されており、市の指定文化財である金銅装双竜環頭大刀柄頭が採集されている。

そのほかの遺跡には中期の竪穴住居が検出され、前・中期の遺物が出土した南黒丸Ｂ遺跡や、中・後期の竪穴住居や掘立柱建物が検出された柏原ミツハシ遺跡、鵜島ツキザキ遺跡（46）、鵜島遺跡（47）、鵜島舟橋ノウテ遺跡（57）、舟橋海岸遺跡（59）などが確認されている。

奈良・平安時代　宿神社前遺跡、鵜飼三つ寺遺跡（27）、柏原助政遺跡（43）、掘立柱建物が確認された柏原ミツハシ遺跡、７～９世紀とされる製塩土器が多量に出土した鵜島ツキザキ遺跡や鵜島遺跡、鵜島ドウガクチＣ遺跡、鵜島舟橋ノウテ遺跡、南黒丸遺跡などがある。



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/25,000）

第１表　遺跡地名表

番号	遺跡番号	枝	名称	所在地	種別	立地	時代
1	05191		法住寺墓地	珠洲市宝立町春日野	経塚・墓	丘陵	中世
2	05011		極楽寺跡	珠洲市宝立町春日野	寺院跡	山地	不詳
3	05192		寺家谷墓地	珠洲市宝立町春日野	墓	丘陵	中世～近世
4	05008		銭ガ塚畑遺跡	珠洲市宝立町春日野	散布地	台地端	不詳
5	05009		銭ガ塚	珠洲市宝立町春日野	墓	台地	中世
6	05193		法住寺製鉄遺跡	珠洲市宝立町春日野	製鉄跡	丘陵	不詳
7	05010		法住寺窯跡群	珠洲市宝立町春日野	窯跡	台地	鎌倉～室町
8	05015		下鳥越ジリメキ遺跡	珠洲市宝立町春日野	散布地	丘陵	縄文
9	05016		春日野堂平遺跡	珠洲市宝立町春日野	散布地	台地	縄文
10	05017		大畠桜井宮司開墾畑遺跡	珠洲市宝立町春日野	散布地	台地	縄文
11	05197		隋念家裏山墓地	珠洲市上戸町南方	墓	丘陵裾	中世
12	05018		大畠南古墳群	珠洲市宝立町春日野	古墳	丘陵	古墳
13	05198		椎神社後方遺跡	珠洲市宝立町春日野	墓	丘陵	中世
14	05199		大畠遺跡	珠洲市宝立町春日野	集落跡	丘陵	縄文
15	05019	1	大畠１号墳	珠洲市宝立町春日野	古墳	丘陵斜面	古墳
		2	大畠２号墳	珠洲市宝立町春日野	古墳	丘陵斜面	古墳
		3	大畠３号墳	珠洲市宝立町春日野	古墳	丘陵斜面	古墳
		4	大畠４号墳	珠洲市宝立町春日野	古墳	丘陵斜面	古墳
16	05022		三杯焼窯跡	珠洲市上戸町南方	窯跡	丘陵	江戸
17	05024		谷崎横穴墓群	珠洲市宝立町春日野	横穴墓	丘陵斜面	古墳
18	05023		春日野大畠窯跡	珠洲市宝立町春日野	窯跡	台地	鎌倉～南北朝
19	——		宿神社前遺跡	珠洲市宝立町春日野	集落跡	平地	縄文～中世
20	05025		春日野正田畑遺跡	珠洲市宝立町春日野	散布地	台地	縄文
21	05200		堂口家墓地	珠洲市宝立町春日野	墓	丘陵	中世
22	05027		中野中世墓	珠洲市宝立町春日野	墓	丘陵	中世？
23	05026		金峰寺スンドン遺跡	珠洲市宝立町金峰寺	散布地	平地	縄文
24	05028		金峰寺カクナイ遺跡	珠洲市宝立町金峰寺	散布地	平地	縄文
25	05201		金峰寺墓地	珠洲市宝立町金峰寺	墓	平地	中世～近世
26	05029		金峰寺タケカワバタケ遺跡	珠洲市宝立町金峰寺	散布地	平地	縄文
27	05030		鵜飼三つ寺遺跡	珠洲市宝立町鵜飼	散布地	平地	古代～近世
28	05031		三つ寺跡	珠洲市宝立町鵜飼	寺院跡	平地	不詳
29	05032		南黒丸Ｂ遺跡	珠洲市宝立町南黒丸	集落跡	平地	弥生後期～古墳
30	05004		西方寺跡	珠洲市宝立町柏原	寺院跡	台地端	室町
31	05002		柏原西方寺遺跡	珠洲市宝立町柏原	散布地	台地	縄文
32	05003		西方寺窯跡群	珠洲市宝立町柏原	窯跡	台地端	室町
33	記 48		西方寺古窯跡	珠洲市宝立町柏原	窯跡	台地端	室町
34	05005		鳥屋尾垣内窯跡	珠洲市宝立町鳥屋尾	窯跡	台地	鎌倉～室町
35	05006		郷カマノマエ遺跡	珠洲市宝立町柏原	散布地	台地端	縄文
36	05007		柏原郷カマノマエ窯跡群	珠洲市宝立町柏原	窯跡	台地端	鎌倉～室町
37	05012		柏原垣内高瀬畑遺跡	珠洲市宝立町柏原	散布地	台地	縄文
38	05014		行人塚	珠洲市宝立町柏原	墓	平地	不詳
39	——		柏原Ａ遺跡	珠洲市宝立町柏原	集落跡	平地	鎌倉～室町
40	05013		薬師堂跡	珠洲市宝立町柏原	寺院跡	平地	不詳
41	05195		加志波良比古神社遺跡	珠洲市宝立町柏原	墓	平地	中世
42	05194		日枝神社横遺跡	珠洲市宝立町柏原	墓	丘陵裾	中世～近世
43	05196		柏原助政遺跡	珠洲市宝立町柏原	集落跡	平地	平安～中世
44	——		柏原ミツハシ遺跡	珠洲市宝立町柏原	集落跡	平地	弥生～中世
45	——		柏原ジッチン遺跡	珠洲市宝立町柏原	集落跡	平地	中世
46	05202		鵜島ツキザキ遺跡	珠洲市宝立町鵜島	集落跡	平地	奈良～平安
47	——		鵜島遺跡	珠洲市宝立町鵜島	集落跡・生産遺跡（製塩）	平地	古墳～中世
48	05203		八幡神社遺跡	珠洲市宝立町南黒丸	散布地	平地	中世
49	05033		南黒丸八幡Ｂ横穴墓群	珠洲市宝立町南黒丸	横穴墓	丘陵斜面	古墳
50	05204		南黒丸八幡墓地	珠洲市宝立町南黒丸	墓	丘陵裾	室町
51	05034		南黒丸八幡Ａ横穴墓群	珠洲市宝立町南黒丸	横穴墓	丘陵斜面	古墳
52	05035		鵜島横穴墓群	珠洲市宝立町鵜島	横穴墓	丘陵斜面	古墳
53	05036		鵜島窯跡	珠洲市宝立町鵜島	窯跡	丘陵端	不詳
54	05037		鵜島ドウガクチＣ遺跡	珠洲市宝立町鵜島	散布地	丘陵裾	縄文、古代～中世
55	05038		鵜島ドウガクチ遺跡	珠洲市宝立町鵜島	散布地	丘陵裾	縄文後期、中世～近世
56	05039		鵜島ドウガクチＢ遺跡	珠洲市宝立町鵜島	散布地	丘陵裾	縄文、中世～近世
57	05041		鵜島舟橋ノウテ遺跡	珠洲市宝立町鵜島	集落跡	平地	古墳～近世
58	05042		舟橋中世墓	珠洲市宝立町鵜島	墓	平地	中世
59	05043		舟橋海岸遺跡	珠洲市宝立町鵜島	散布地	平地	古墳
60	05040		南黒丸遺跡	珠洲市宝立町南黒丸	散布地	丘陵裾	縄文、古代～近世
61	05044		鵜島安養寺遺跡	珠洲市宝立町鵜島	墓・寺院跡	平地	中世

中　　世　珠洲焼窯跡の存在が知られている。法住寺窯跡群（７）では４基の珠洲焼の窯跡が確認されている。時期は吉岡編年Ⅱ～Ⅳ期、13～14世紀である。春日野大畠窯跡（18）では３基の珠洲焼の窯跡が確認されている。時期は吉岡編年Ⅳ期、14世紀である。西方寺窯跡群（32）では４基の珠洲焼の窯跡が確認されている。西方寺古窯跡（33）はそのうちの１基で、県の指定史跡となっている。時期は吉岡編年Ⅴ～Ⅶ期、15世紀である。鳥屋尾垣内遺跡（34）では珠洲焼の窯跡が確認されており、４～５基の支群と推定されている。時期は吉岡編年Ⅱ～Ⅳ期、13～14世紀である。柏原郷カマノマエ窯跡群（36）では珠洲焼の窯跡が確認されており、４～５基の支群と推定されている。時期は吉岡編年Ⅲ～Ⅴ期、13世紀後半～15世紀前半である。

また、市域には五輪塔などの石造遺物が多く存在する。五輪塔が確認された法住寺墓地（１）、寺家谷墓地（３）、隋念家裏山墓地（11）、椎神社後方遺跡（13）、堂口家墓地（21）、日枝神社横遺跡（42）、珠洲焼の蔵骨器・銭貨・火葬骨・五輪塔・宝篋印塔・板碑が確認された金峰寺墓地（25）、五輪塔や板碑が確認された加志波良比古神社遺跡（41）、一石五輪塔が確認された鵜島安養寺遺跡（61）などが知られている。八幡神社遺跡（48）では永和２年（1376年）銘の石層塔が存在しており、市指定の文化財となっている。

集落跡としては柏原Ａ遺跡（39）、柏原ミツハシ遺跡、柏原ジッチン遺跡（45）、鵜島遺跡、南黒丸遺跡などがある。柏原Ａ遺跡では12世紀後半～15世紀前半の遺物が出土しており、14世紀を主体とした集落跡と考えられている。珠洲焼が多量に出土しており、近くにある柏原郷カマノマエ窯跡群との関連が注目される。柏原ミツハシ遺跡では古代末～中世初頭の井戸が検出されており、坑底からは漆器皿や石製人形が出土している。柏原ジッチン遺跡では中世前半の掘立柱建物や15世紀後半以降の石組み井戸が検出されている。鵜島遺跡では12世紀後半～15世紀後半の遺構・遺物が確認されており、珠洲焼甕を３個体組み合わせた井戸側や縦板組隅柱横桟留の井戸側を持つ井戸が検出されている。南黒丸遺跡では13～14世紀を主体とした集落跡が確認されている。南北７間×東西５間の総柱建物をはじめとする多数の掘立柱建物や井戸が検出され、寺院関連遺物と考えられる水瓶・水注や瓦が出土しており、若山荘に密接な関連のある集落跡と推定されている。

そのほかの遺跡には銭ガ塚（５）、西方寺跡（30）、柏原助政遺跡、土葬墓が５基検出されている南黒丸八幡墓地（50）、鵜島ドウガクチＣ遺跡、鵜島ドウガクチ遺跡、鵜島ドウガクチＢ遺跡、鵜島舟橋ノウテ遺跡、舟橋中世墓（58）などがある。

参考文献

伊藤雅文　1993　『大畠南古墳群発掘調査報告』　石川県立埋蔵文化財センター
岩瀬由美　2004　『珠洲市柏原ミツハシ遺跡・柏原ジッチン遺跡』　㈶石川県埋蔵文化財センター
大西　顕　2004　『珠洲市鵜島遺跡・鵜島ツキザキ遺跡』　㈶石川県埋蔵文化財センター
浜崎悟司　2003　『珠洲市南黒丸遺跡・南黒丸Ｂ遺跡』　㈶石川県埋蔵文化財センター
平田天秋　2006　『珠洲市窯跡群』　珠洲市教育委員会
宮川勝次　2004　『珠洲市柏原Ａ遺跡』　㈶石川県埋蔵文化財センター

第３章　調査の概要

調査区は排水路の敷設箇所に設定され、Ａ～Ｃ区と呼称した。調査区の中心に実測用の杭を任意に打ったが、グリッドによる区画割りは行っていない。

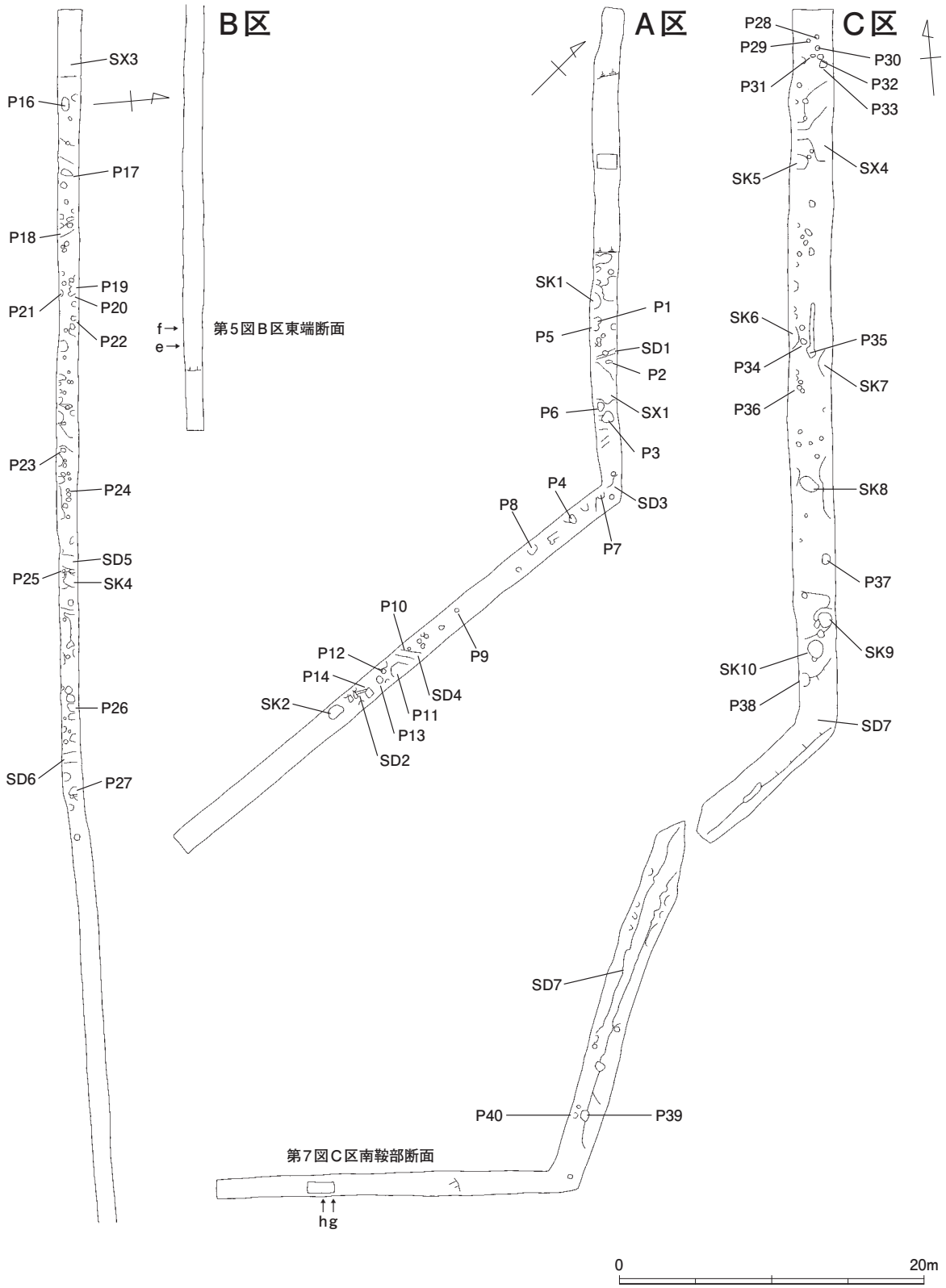
Ａ区は磐若川右岸に位置する「く」の字状の調査区である。地形は調査区南端から磐若川のある北へ低くなり、遺構検出面の標高は3.4～3.7ｍである。調査区西端で旧磐若川と思われる流路、南端で鞍部を確認した。地山は褐・黄灰色砂質土である。検出した遺構は土坑２基・溝４条・ピット14基・落ち込み１基である。調査区中央部で多くの検出を検出している。遺構からは主に弥生時代～古墳時代の遺物が出土し、包含層からは弥生時代～中世の遺物が出土している。

Ｂ区は現宿集落の東端から海側へと伸びる東西方向に長い調査区である。地形は現宿集落東端から海側へと低くなり、遺構検出面の標高は3.9～4.1ｍである。調査区東半部で鞍部を確認した。地山は褐・青灰色砂である。検出した遺構は土坑１基・溝２条・ピット12基・落ち込み１基である。調査区西端から中央部にかけて多くの遺構を検出した。遺構からは主に縄文時代～中世の遺物が出土し、包含層からは縄文時代～近世の遺物が出土している。

Ｃ区は現宿集落の西端に接し、屈曲の弱いW字状を呈する調査区である。地形は現宿集落西端に接している調査区で高く、そこから離れた北端と西端へと低くなる。したがって宿神社周辺は地形が高く、そこから海側・磐若川へと地形が低くなる傾向が窺える。遺構検出面の標高は3.7ｍ～4.3ｍである。調査区南端で鞍部を確認した。地山は青灰色砂を主体とするが、調査区北端は粘質土となる。検出した遺構は土坑６基・溝１条・ピット13基である。調査区北端と現宿集落に接する箇所で多くの遺構を検出した。遺構からは主に縄文時代と中世の遺物が出土し、包含層からは縄文時代～近世の遺物が出土している。

各区の遺構・遺物の状況をまとめると、Ａ・Ｂ区で弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が目立ち、現宿集落に接するＢ区西端とＣ区で中世の遺構・遺物が目立ち、Ｃ区北端で縄文時代の遺構・遺物が目立つ状況が窺える。また、包含層からは縄文時代～近世と幅広い時期の遺物が出土しており、耕地整理による影響が全調査区で及んでいる可能性が高い。

調査着手前、本遺跡は弥生・古墳時代の集落跡と予想されていたが、調査の結果、複数時期にわたる集落遺跡であることが明らかとなった。



第3図　遺構配置図（S=1/400）

第４章　遺　　構

Ａ　　区（第４・８図）

Ａ区は磐若川右岸に位置する「く」の字状の調査区である。Ａ区北西端から南東へ16ｍは旧流路で砂礫層が堆積しており、Ａ区南端から北東へ12ｍは鞍部となる。層位は大きく３層に分かれ、耕土・床土→暗灰褐・暗褐灰色砂質土→褐・黄灰色砂質土の地山となる。旧流路や鞍部では地山が青灰色砂となり、地形の高低で地山の土質に差異を確認できる。耕土・床土や暗灰褐・暗褐灰色砂質土から弥生時代～中世の遺物が出土した。

遺構検出面の標高は3.4～3.7ｍを計測する。土坑（ＳＫ）２基・溝（ＳＤ）４条・ピット（Ｐ）14基・落ち込み（ＳＸ）１基を検出した。ピット番号は主に遺物が出土したものに付した。部分的にピットの集中している箇所があり、建物を構成する可能性がある。遺構からは主に弥生時代～古墳時代の遺物が出土している。Ａ区では北西部と南部とに便宜的に分け、土坑や溝を中心に説明を加えていく。なお、検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示し、土坑やピットについては第２・３表に計測値などを記した。Ｂ・Ｃ区についても同様である。

ＳＫ１（第４・８図）　Ａ区北西部で検出した。調査区壁に接するため全形を窺えないが、平面は円形と判断した。検出高3.7ｍ・平面規模１ｍ×40㎝以上・深さ35㎝を計測する。埋土は２層に分かれ、上層は暗灰色砂質土で下層が濁暗灰色砂質土となる。上層に炭粒を少量含むが、地山土の混入は見られない。上層の厚みから判断して、ごく短期間に自然堆積したものと考える。断面図では３´層が３層を、ＳＫ１が４層を切っていることから、遺構面が複数存在していた可能性がある。第８図１の甕が出土した。

ＳＫ２（第４図）　Ａ区南部で検出した。楕円形を呈し、検出高3.54ｍ・平面規模1.06ｍ×70㎝・深さ40㎝を計測する。坑底の北側は一段低くなっており、湧水を確認した。

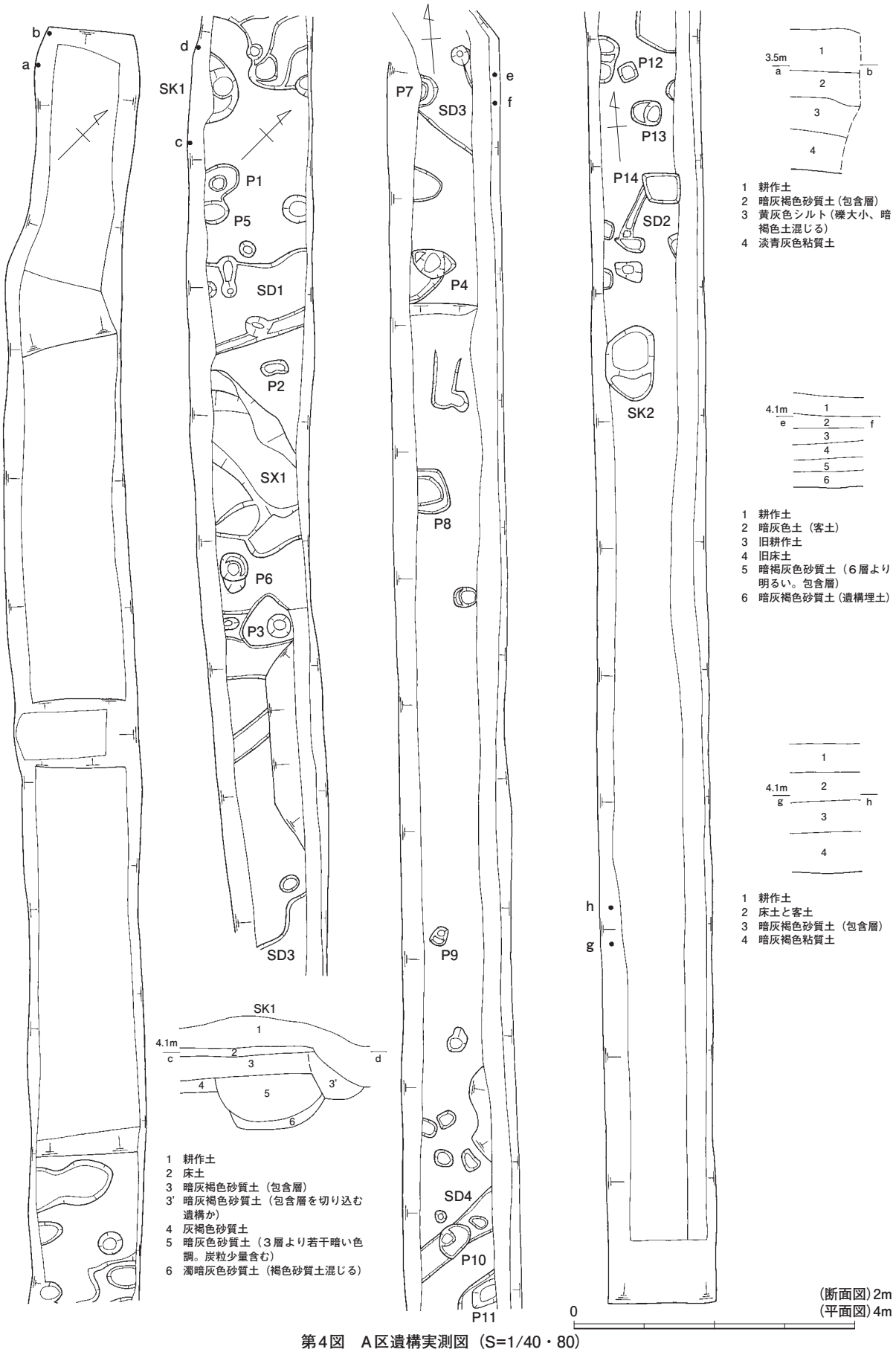
ＳＤ１（第４図）　Ａ区北西部で検出した。検出高3.64ｍ・幅90㎝～1.1ｍ・深さ12㎝を計測する。３基のピットに切られており、溝の東端には幅20㎝・深さ７㎝の溝が南北方向に走る。

ＳＤ２（第４図）　Ａ区南部で検出した。検出高3.62ｍ・深さ８㎝を計測し、溝幅が14㎝前後と狭い。溝の北・南端はＰ14などのピットに切られるようにして途切れており、溝の長さは80㎝と短い。

ＳＤ３（第４図）　Ａ区北西部と南部の合流地点で検出した。溝ではなく落ち込みの可能性がある。検出高3.56ｍ・深さ３㎝、北端と南端の上端距離で2.7ｍを計測する。溝底で検出したＰ７は２段掘りとなっていることから柱穴の可能性があり、建物跡かもしれないがよくわからなかった。埋土は暗灰褐色砂質土の単一層である。

ＳＤ４（第４図）　Ａ区南部で検出した。検出高3.63ｍ・幅40～45㎝・深さ７㎝を計測する。溝底でＰ10を検出しており、２段掘りとなっていることから柱穴の可能性がある。

ＳＸ１（第４図）　Ａ区北西部で検出した。溝状を呈し、検出高3.62ｍ・幅1.8ｍ・深さ36㎝を計測する。磐若川方向に溝底が傾斜しており、東部は不整形に掘り込まれていた。当初は楕円の土坑状を呈していたが、埋土が横方向に伸びていたため掘り広げていった結果、溝状となったものである。弥生時代～古墳時代の遺物が出土した。



第４図　Ａ区遺構実測図（S=1/40・80）

Ｂ　　区（第５・８図）

Ｂ区は現宿集落の東端から海側へ直線状に伸びる調査区である。Ｂ区東端から西へ53ｍは湧水の激しい鞍部である。層位は大きく４層に分かれ、耕土→暗褐灰色土→暗褐灰色砂質土→褐・青灰色砂の地山となる。耕土や暗褐灰色土、及び暗褐灰色砂質土から縄文時代～近世の遺物が出土した。遺構検出面の標高は3.9～4.1ｍで、鞍部のある海側方向へと徐々に低くなる。ＳＫ１基・ＳＤ２条・Ｐ12基・ＳＸ１基を検出した。Ｂ区中央部から西端にかけてピットの集中している箇所があり、建物を構成する可能性がある。第５図Ｐ17・18付近にある溝（アミカケ箇所）は建物周溝の可能性があり、(　)内にピットの深さの計測値を記しておいた。なお、ＳＫ３、Ｐ15及びＳＸ２は欠番となっている。

遺構からは主に弥生時代～古墳時代の遺物が出土した。ＳＫ４・Ｐ25から縄文時代の遺物、Ｐ17・18・ＳＸ３からは中世の遺物が出土している。

ＳＫ４（第５・８図）　Ｂ区中央部で検出した。隅丸方形を呈し、検出高4.09ｍ・平面規模76㎝以上×72㎝・深さ９㎝を計測する。東部に接する浅い落ち込みを切る。第８図７の鉢が出土した。

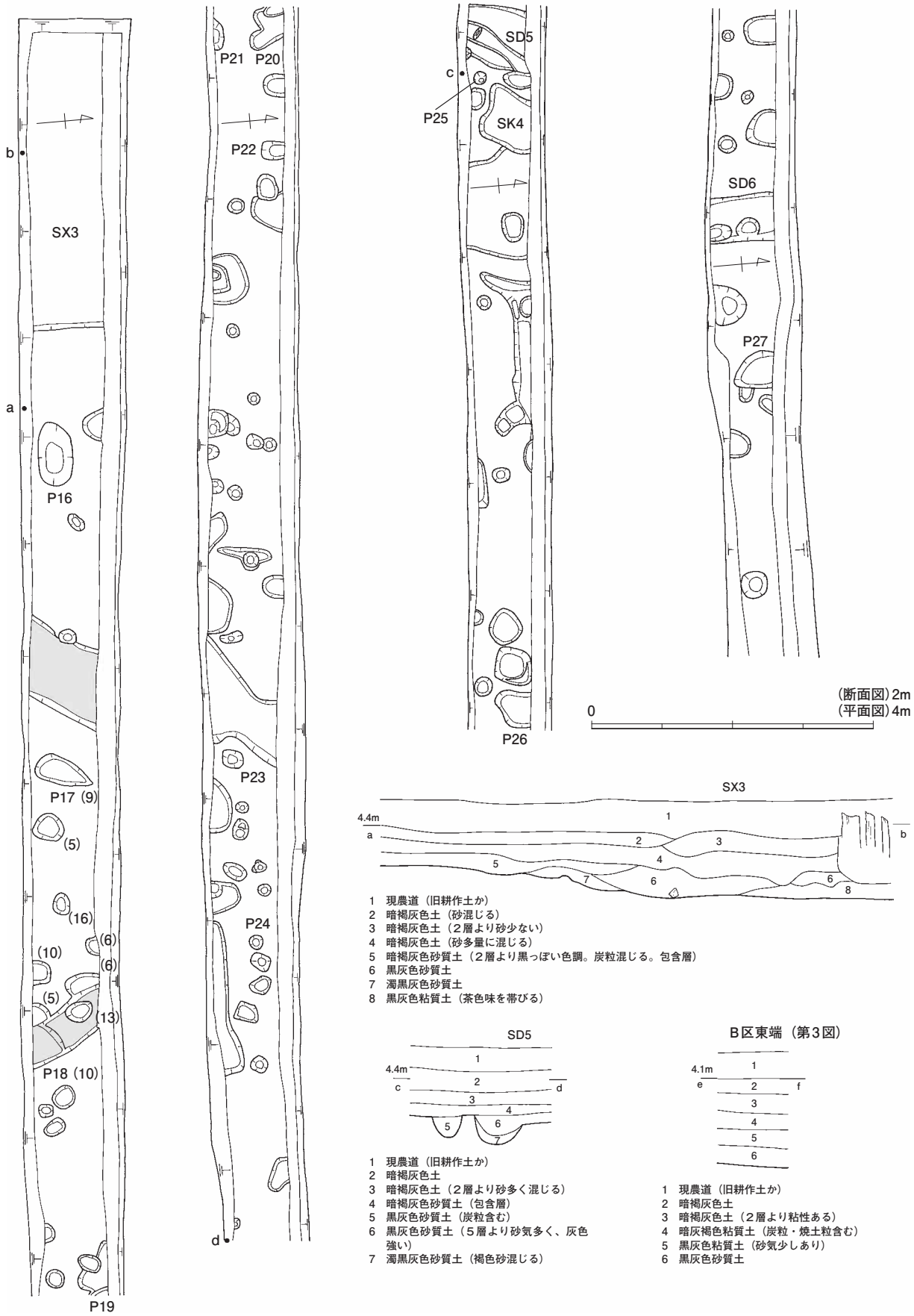
ＳＤ５（第５図）　Ｂ区中央部で検出した。検出高4.07ｍ・幅26㎝・深さ９㎝を計測する。埋土は２層に分かれ、上層は黒灰色砂質土で下層が濁黒灰色砂質土となる。炭化物や地山土の混入は見られない。浅い溝状の落ち込みを切り、北端は細長いピットに切られている。幅20㎝の板状の木製品が溝底に突き刺さった状態で出土した。

ＳＤ６（第５図）　Ｂ区中央部で検出した。検出高3.98ｍ・幅64㎝・深さ８㎝を計測する。溝の東壁部をピットが切っており、溝底には径30㎝で深さ10㎝のピットが掘り込まれていた。

ＳＸ３（第５・８図）　Ｂ区西端部から東へ４ｍの範囲で検出した。検出高4.08ｍ・深さ20㎝を計測する落ち込みである。埋土は３層に分かれ、黒灰色砂質土→濁黒灰色砂質土→黒灰色粘質土となる。炭化物や地山土の混入は見られない。底面に粘質土が堆積していることから、鞍部のように淀んでいた状況が窺える。第８図８の甕や珠洲焼が出土した。

Ｃ　　区（第６・７・９・10図）

Ｃ区は現宿集落の西端に接し、屈曲の弱いW字状を呈する調査区である。Ｃ区南端の東西に長い部分は湧水の激しい鞍部である。層位は大きく３層に分かれ、耕土・農道土→暗灰褐・暗褐灰色砂質土→青灰色砂の地山となる。Ｃ区北端から南へ12ｍは地山が粘質土で、層位は耕土→粘質土→砂質土→粘質土→地山となる。湧水が激しく、地形の低いせいもあるが、水中ポンプを一晩止めると雨の降らない日でもプール状態となった。南端の鞍部の層位は耕土→粘質土→砂質土→粘質土→砂質土→地山となる。つまりＣ区で地形が低いところは粘質土と砂質土の互層状態になっており、地形の高い所よりも頻繁に流水などの堆積が起きていたことを示す。また、第７図ｅ―ｆ断面６層の黄褐色砂質土は砂礫が多く混じり部分的に硬くしまる所もあることから人為的埋土の可能性が高く、水平に堆積していたことから整地層と判断した。整地層はＣ区南部の未掘削箇所（排水路が生きていたため）から南へ８～20ｍの範囲に存在し、西側の壁では確認できない。つまり整地層はＳＤ７を境にして現宿集落の方向に広がるものと推測できる。耕土・農道土や暗灰褐・暗褐灰色砂質土から縄文時代～近世の遺物が出土した。遺構検出面の標高は3.7ｍ～4.3ｍで、宿神社のある南方向へと徐々に高くなる。ＳＫ６基・ＳＤ１条・Ｐ13基を検出した。部分的にピットの集中している箇所があり、建物を構成



第5図　B区遺構実測図（S=1/40・80）

する可能性がある。遺構からは主に縄文時代と中世の遺物が出土している。なお、Ｃ区では北部と南部とに便宜的に分けて説明を加えていく。

ＳＫ５（第６図）　Ｃ区北部で検出した。調査区壁に接するため全形を窺えないが、平面は楕円形と判断した。検出高3.69ｍ・平面規模74㎝×90㎝以上・深さ35㎝を計測する。埋土は粘質土を基調とする。坑底は湧水が激しい。第９図28の鉢などの縄文土器の他に、暗茶褐色～黒色の玉髄や頁岩ないし流紋岩の両極剥離剥片が出土している。

ＳＫ６（第６・９図）　Ｃ区北部で検出した。調査区壁に接するため全形を窺えないが、平面は円形と判断した。検出高3.94ｍ・平面規模50㎝以上×1.3ｍ・深さ40㎝を計測する。埋土は黒灰色粘質土の単一層で焼土粒を含み、10㎝以上の礫を多く含んでいた。地山土の混入が見られないことから、ごく短期間に自然堆積したものと判断できる。坑底は湧水が激しく、平たい面を上にした30㎝大の石が出土した。第９図23・24の鉢や25・26の甕、27の石皿が出土した。当初は上面で25・26が出土したが、坑底付近で23・24が出土しており、25・26は混入の可能性が高い。

ＳＫ７（第６・９図）　Ｃ区北部で検出した。調査区壁に接するため全形を窺えないが、平面は円形と判断した。検出高3.88ｍ・平面規模70㎝以上×2.08ｍ・深さ36㎝を計測する。埋土は２層に分かれ、上層は黒灰色粘質土で下層が暗灰色粘質土となる。上層に炭化物を少量含み、下層の一部に砂質土が確認できる。坑底は湧水が激しい。第９図29の鉢などの縄文土器が出土した。埋土が粘質土で遺物も縄文土器が出土していることから、ＳＫ５・６と時期的に近いものと考える。

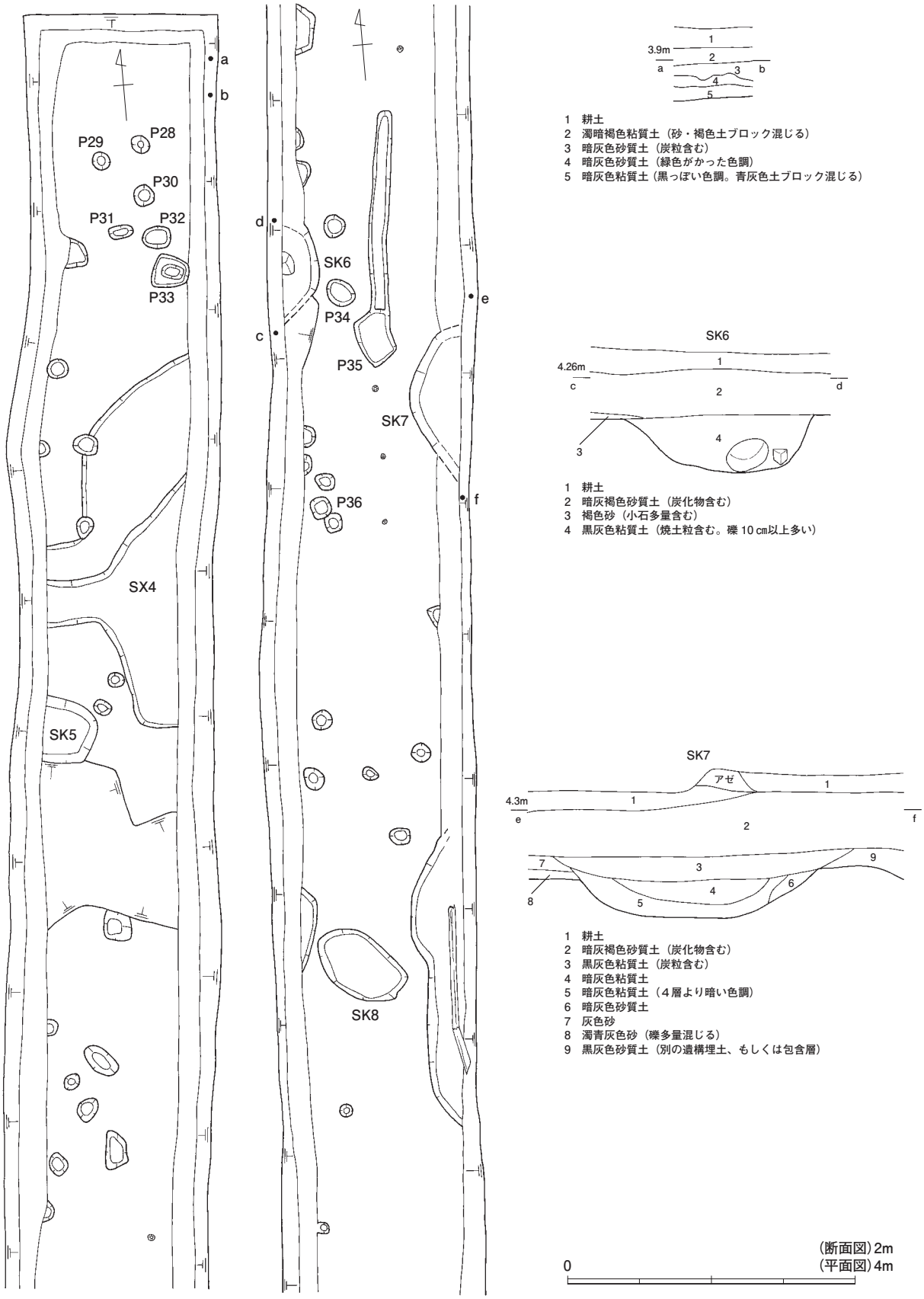
ＳＫ８（第６図）　Ｃ区北部で検出した。楕円形を呈し、検出高4.1ｍ・平面規模1.28ｍ×80㎝・深さ32㎝を計測する。埋土は濁褐灰色砂質土の単一層である。坑底は湧水が激しい。珠洲焼が出土した。東に隣接する撹乱状の浅い落ち込みからは板状の木製品が出土しており、暗渠に伴うものと考える。

ＳＫ９（第７図）　Ｃ区北部で検出した。円形を呈し、検出高4.21ｍ・平面規模96×86㎝・深さ38㎝を計測する。埋土は濁褐灰色砂質土の単一層で地山土を含んでいることから人為的に埋められた可能性がある。坑底は湧水が激しい。重複して存在する、褐灰色砂質土の浅い落ち込みや暗褐灰色砂質土のピットを切る。縄文土器が出土しており、上面では珠洲焼が出土した。

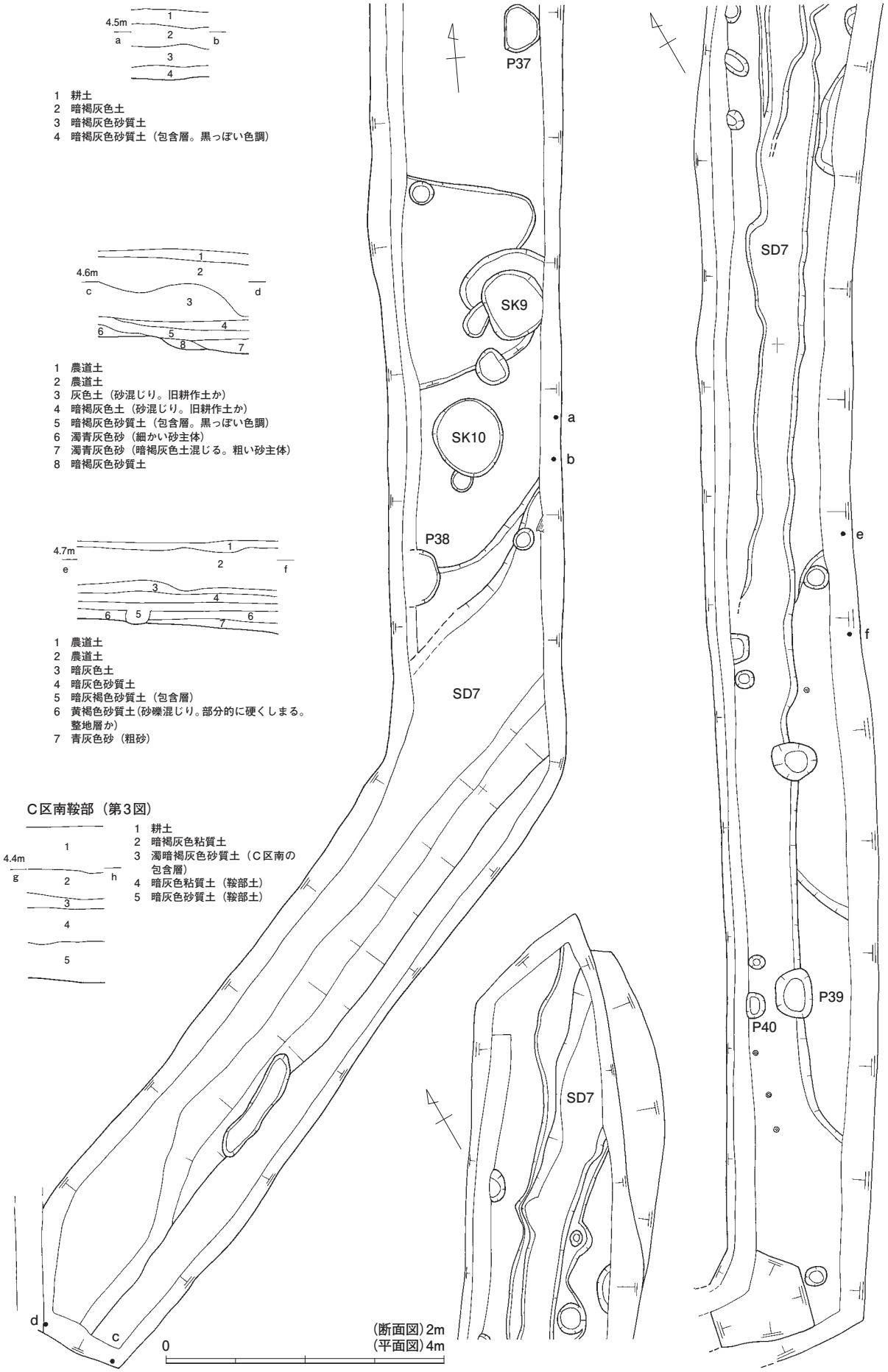
ＳＫ10（第７図）　Ｃ区北部で検出した。円形を呈し、検出高4.19ｍ・平面規模1.14ｍ×１ｍ・深さ30㎝を計測する。埋土は濁褐灰色砂質土の単一層で地山土を含んでいることから人為的に埋められた可能性がある。坑底は湧水し、南に隣接する暗褐灰色砂質土のピットを切る。須恵器が出土した。

ＳＤ７（第７・９・10図）　Ｃ区南部で検出した。Ｃ区南部の形状と沿うようにして南北方向へと蛇行しており、溝底は北側ほど低くなる。溝の北端はＳＫ９・10やＰ38付近、南端は鞍部付近で途切れる。先述した整地層が調査区東壁で確認でき、往時の宿集落の区画を目的とした溝と考える。検出高4.15～4.27ｍ・深さ６～12㎝を計測する。溝幅は60㎝～３ｍと計測値に幅があり、削平の度合いが箇所によって異なっていたためと考える。埋土は濁青灰色砂を基調とし、溝底付近で部分的に暗褐灰色砂質土を含む。第９図35の甕や36の壷、37・38の椀や39の台付鉢、第10図40・41・42の片口鉢が出土した。

ＳＸ４（第６図）　Ｃ区北部で検出した。方形状の浅い落ち込みである。北部にテラス、西部に溝状の張り出し部を持つ。検出高3.75ｍ・深さ25㎝、北端と南端の上端距離は調査区東壁で5.2ｍ、溝状の張り出し部は幅1.15ｍ、底面とテラスの比高差は16㎝を計測する。埋土は濁暗灰褐色粘質土を基調とし、炭化物を少量含む。当初は竪穴状の遺構を想定していたが、底面の湧水が激しく、時間が経つほどに掘り方の形状が崩れていく状況であり、よくわからなかった。縄文土器が出土しており、上面では珠洲焼が出土した。



第６図　Ｃ区遺構実測図①（S=1/40・80）



第７図　C区遺構実測図②（S=1/40・80）

第２表　土坑計測表

番号	位置	検出高	形状	規模	深さ	備考
1	A区	3.70	円？	100 × (40)	35	第４図、第８図１出土。弥生・古墳
2	A区	3.54	楕円	106 × 70	40	第４図。弥生・古墳
4	B区	4.09	隅丸方	(76) × 72	9	第５図、第８図７出土。縄文
5	C区	3.69	楕円？	74 × (90)	35	第６図、第９図28出土。縄文
6	C区	3.94	円？	(50) × 130	40	第６図、第９図23～27出土。縄文
7	C区	3.88	円？	(70) × 208	36	第６図、第９図29出土。縄文
8	C区	4.10	楕円	128 × 80	32	第６図。中世
9	C区	4.21	円	96 × 86	38	第７図。中世
10	C区	4.19	円	114 × 100	30	第７図。奈良・平安、須恵器出土。

単位は検出高がm、他はcm

第３表　ピット計測表

番号	位置	検出高	形状	規模	深さ	備考
1	A区	3.65	円	24 × 22	10	第４図、第８図２出土。弥生・古墳
2	A区	3.60	楕円	38 × 20	12	第４図。弥生・古墳
3	A区	3.61	円	34 × 34	25	第４図。弥生・古墳
4	A区	3.59	楕円	64 × (40)	26	第４図。弥生・古墳
5	A区	3.67	楕円？	(36) × 32	21	第４図。弥生・古墳
6	A区	3.52	楕円	56 × 38	34	第４図。弥生・古墳
7	A区	3.51	円？	(22) × 46	13	第４図。弥生・古墳
8	A区	3.44	楕円？	(44) × 62	7	第４図。弥生・古墳
9	A区	3.55	楕円	26 × 20	27	第４図。弥生・古墳
10	A区	3.55	楕円	50 × 38	13	第４図。弥生・古墳
11	A区	3.57	楕円	(34) × 32	20	第４図。弥生・古墳
12	A区	3.62	隅丸方	26 × 24	35	第４図。弥生・古墳
13	A区	3.62	楕円	44 × 36	27	第４図。弥生・古墳
14	A区	3.62	隅丸方	48 × 44	24	第４図。弥生・古墳
16	B区	4.11	楕円	88 × 48	22	第５図。弥生・古墳
17	B区	4.12	楕円	80 × 46	9	第５図。中世
18	B区	4.03	楕円？	(46) × 54	6	第５図、第８図５出土。中世
19	B区	3.98	楕円？	(30) × 18	5	第５図。弥生・古墳
20	B区	4.03	不整	―	6	第５図。弥生・古墳
21	B区	4.03	円？	(12) × 40	14	第５図。弥生・古墳
22	B区	4.03	楕円？	(30) × 24	13	第５図、第８図６出土。弥生・古墳
23	B区	4.04	円	28 × 24	12	第５図。弥生・古墳
24	B区	4.10	円	20 × 20	14	第５図。弥生・古墳
25	B区	4.13	円	18 × 18	8	第５図。縄文
26	B区	4.04	楕円？	(50) × 50	7	第５図。弥生・古墳
27	B区	3.94	楕円？	(62) × 54	7	第５図。弥生・古墳
28	C区	3.71	円	26 × 22	17	第６図。縄文
29	C区	3.69	円	24 × 24	17	第６図。縄文
30	C区	3.75	円	26 × 26	27	第６図。縄文
31	C区	3.76	楕円	30 × 18	29	第６図。縄文
32	C区	3.76	円	38 × 32	18	第６図。縄文
33	C区	3.76	隅丸方	48 × 44	15	第６図。縄文
34	C区	3.94	円	42 × 34	20	第６図。縄文
35	C区	3.88	隅丸長方	70 × 48	18	第６図、第９図30・31出土。縄文
36	C区	3.90	隅丸方	30 × 26	14	第６図、第９図32出土。縄文
37	C区	4.09	円	(50) × 64	12	第７図、第９図33出土。中世
38	C区	4.18	円？	80 × (54)	23	第７図。中世
39	C区	4.22	円	70 × 50	11	第７図、第９図34出土。弥生・古墳
40	C区	4.22	円	36 × 24	8	第７図。弥生・古墳

単位は検出高がm、他はcm

第５章　遺　　物

Ａ区（第８図）　１はＳＫ１から出土した土師器の甕である。頸部から口縁部にかけて器壁の厚みを減じ、内面は口縁端部にまで横方向のハケメが施される。２次的な加熱を強く受けている。２はＰ１から出土した須恵器の瓹である。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられており、断面の割れ口はやや赤褐色を呈する。外面には波状文が施されており、胎土に海綿骨針を含む。３～５は包含層出土遺物である。３は青磁の椀である。口縁端部は丸く仕上げられており、外面には鎬蓮弁文が施される。４は土師器の柱状高台である。上に杯か皿が付く器種と思われる。外面にはロクロによる凹凸がよく残っており、底部に回転糸切り痕がある。

Ｂ区（第８図）　５はＰ18から出土した縄文土器の鉢である。外面には縄文が施され、それを上下に区画するかのように沈線が横方向に施されている。接合痕は内面と断面に１箇所ずつ確認でき、内面には丁寧なナデが施されている。胎土には砂粒を含み、粗砂はさほど目立たない。６はＰ22から出土した弥生土器の壷である。底部外面は中央が窪み、幅１cmほどの高台状となっている。内面にはハケメが密に施されており、外面にも磨耗はしているが一部にハケメが確認できる。内面に黒斑がある。７はＳＫ４から出土した縄文土器の鉢である。外面には細かい単位の縄文が施される。器壁の厚みは８mm程度で、底部へと行くにつれ厚みを増す。器表面に凹凸が残り、接合痕は内面に１箇所確認できる。８はＳＸ３から出土した弥生土器の甕である。口縁部に段を持ち、その外面にあたる幅2.5cmほどの口縁帯には凹線文が薄く残存している。頸部は「くの字」状に鋭く屈曲しており、その内面下半にはケズリが施されている。胎土に砂粒を含み、粗砂が部分的に目立つ。９～22は包含層出土遺物である。９・10は縄文土器の鉢である。９は口縁端部が丁寧に面取りされ、部分的にツルツルになっている。内面に接合痕を１箇所確認できる。縄文による施文は確認できない。外面には厚く煤が付着している。10は磨耗顕著で不明瞭であるが、外面には縄文が施され、横方向にやや歪んだ沈線が施されている。接合痕は内面に１箇所確認できる。胎土に砂粒が密に混和されており、２次的な加熱を強く受けている。11は弥生土器の甕である。底部は平底で1.5cmほどの厚みを持ち、外面の一部にハケメ、内面に指によるナデの痕跡が確認できる。外面に黒斑がある。12は土師器の高杯である。脚部は器壁の厚みが均一で直線的であり、杯部内面はフラットになっている。磨耗顕著で不明瞭であるが、外面に縦方向のミガキ、内面に横方向のケズリの痕跡が確認できる。胎土は砂粒を多く含む。13～15は須恵器である。13は蓋で天井部外面にケズリが施される。口縁端部は丸く仕上げられており、端部内面下端に稜が付く。胎土に微砂粒を含み、ザラザラした質感となっている。14は有台杯である。口縁部は斜め上方に伸び、端部は丸い。高台はわずかに外反しており、踏ん張るように接地する。砂粒が少なく粘りのある胎土で、内外面とも比較的滑らかな質感である。15は無台杯で、底部外面に回転糸切り痕がある。胎土に微砂粒を含み、ザラザラした質感であるが、内面には使用痕があり、滑らかとなっている。16は土師器の椀で、底部外面に回転糸切り痕がある。海綿骨針を多く含み、砂粒の混和も目立つ。17～20は珠洲焼で17～19は片口鉢である。17の内面はロクロ痕による凹凸が目立ち、その下方の一部におろし目が確認できる。口縁端部は内傾して幅1.8cmの段を持ち、そこに波状文が５条施されている。18は内面に幅1.8cmで４条のおろし目が確認できる。口縁端部は内傾して幅2.4cmの段を持ち、そこに波状文が６条施されている。19は底部から斜め上方へとやや内湾しながら立ち上がって口縁部に至り、その端部は幅５mmほどで面取りされている。体・底部境は直立気味で、その外面には指頭痕が１箇所ある。底部外面に静止糸切り痕がある。内面はザラつき、使用痕は

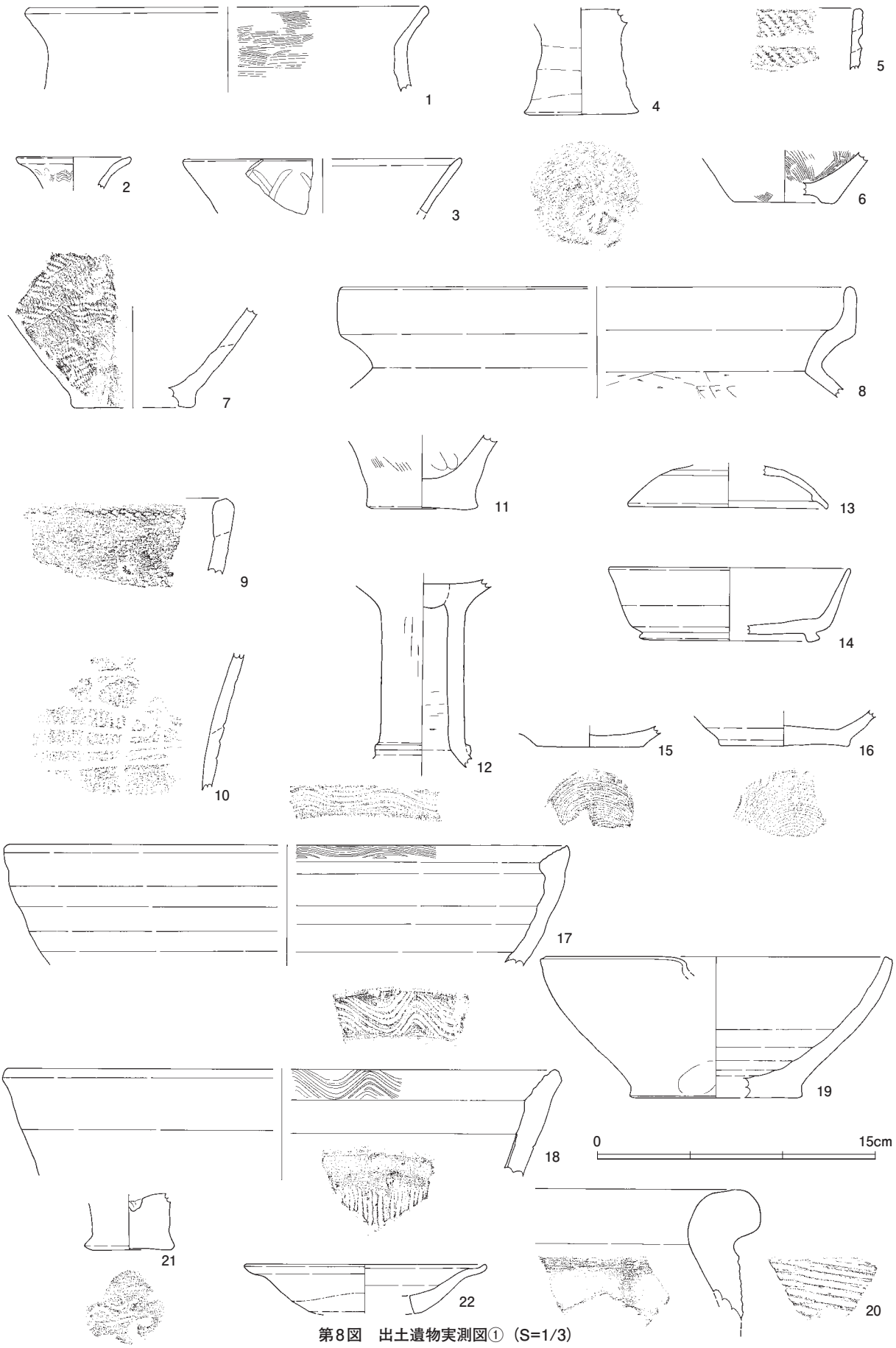
さほど目立たない。20は甕である。口縁部は斜め上方に短く屈曲し、肥厚した端部はやや丸みを持つ。体部外面のタタキは浅い。21は土師器の柱状高台である。上端に棒で突っ込んだような窪みがあり、そこから杯・皿状に成形するものと考える。磨耗顕著で不明瞭であるが、底部外面に回転糸切り痕がある。22は肥前陶器の皿である。口縁部を「く」の字状に折り曲げ、更に端部を上方に引き上げる。釉は灰オリーブ色の灰釉で内面と外面上半部に及ぶ。素地は灰色で砂粒を含むが緻密である。

Ｃ区（第９・10図） 23～27はＳＫ６から出土した。23・24は縄文土器の鉢である。23は外面に縄文が施され、底部外面には簾状の圧痕がある。図化されていないが、内面に２箇所の接合痕がある。胎土には砂粒を多く含み、粗砂が目立つ。24は波状口縁を持つ。外面に幅８㎜で３条の沈線が横方向に２箇所あり、それを区画するようにして深めの沈線１条が横方向に施されている。また、縦方向にも沈線がある。内面に接合痕が２箇所あり、口縁端部には刻み目が施されている。25・26はＳＫ６から出土した弥生土器の甕である。口縁端部内面にハケ状具による刻み目が施され、内外面にはハケメが施される。胎土には砂粒を多く含み、外面には煤が付着する。27は安山岩製の石皿で2.2㎝の厚みを持つ。上面に使用痕があり、やや凹凸のある滑らかな面となっているが、上面外周部と下面はザラついている。滑らかな箇所の色調はややくすんでいる。28～30、32は縄文土器の鉢である。28はＳＫ５から出土した。外面に縄文が施され、それを区画するように沈線が横方向に施される。接合痕は２箇所ある。胎土に砂粒や海綿骨針を多く含む。29はＳＫ７から出土した。外面に縄文が施され、接合痕が２箇所ある。内面に黒斑がある。胎土に砂粒を多く含み、粗砂が目立つ。30・31はＰ35から出土した。30は外面に沈線が施されており、左半部の沈線が右半部の沈線を切っている。つまり、施文は左から右へと行われていたことがわかる。接合痕が１箇所あり、内面に隆起部を持つ。胎土に砂粒を含むが、海綿骨針は含んでいない。31は漆器の椀である。推定で口径13.7㎝、底径8.3㎝を計測し、内面と外面に黒漆が施されているが、底部外面にはない。32は図面よりも口縁端部がフラット気味に仕上げられている。２次的加熱を強く受けている。33はＰ37から出土した土師器の皿である。底部内面中央が強く盛り上がり、中央から外側への回転ナデ後に口縁部と底部の境に強いナデが施されている。口径は6.2㎝を計測し、底部外面に回転糸切り痕がある。34はＰ39から出土した弥生土器の甕である。口縁部に段を持ち、端部はやや内傾している。胎土に赤色粒を含む。35～42はＳＤ７から出土した。35は弥生土器の甕である。口縁部に段を持ち、端部は直立気味である。胎土に砂粒を含み、粗砂が目立つ。36は弥生土器の壷である。口縁部外面にわずかな段を持ち、頸部外面には縦方向のハケメが施されている。胎土に赤色粒を含む。37・38は土師器の椀である。磨耗顕著で不明瞭だが、底部外面に回転糸切り痕がある。体・底部の境は37がやや外反し、38は直立気味となっている。39～42は珠洲焼で、39は台付鉢である。台部外面は縦方向にヘラ状工具による丁寧なナデが施されている。40～42は片口鉢で、底部外面には静止糸切り痕がある。40は底部から斜め上方へとやや内湾しながら立ち上がり、器壁の厚みを少しずつ減じながら口縁部に至る。器高が9.3㎝、片口部の径は３㎝を計測する。内面は滑らかでロクロ痕による凹凸は目立たない。41・42は器壁の厚みを均一に保ちながら底部から斜め上方へと直線的に立ち上がる。41は内面には幅８㎜で４条のおろし目が放射状に施されている。内面の一部には、おろし目の前に幅５㎜ほどの沈線状の抉りが５条施されている。42は内面には幅1.8㎝で９条のおろし目が切りあうようにして施されている。体・底部境の外面には指頭痕が２箇所ある。43は包含層から出土した弥生土器の壷である。底部外面は中央が窪み、幅１㎝ほどの高台状となっている。内外面にはハケメやナデが施されており、外面には指頭痕がある。胎土に砂粒や海綿骨針を多く含む。44は安山岩製の打製石斧である。内外面ともに磨耗顕著で不明瞭だが、表・裏面は自然面が残り、側面には調整打痕が多く確認できる。包含層から出

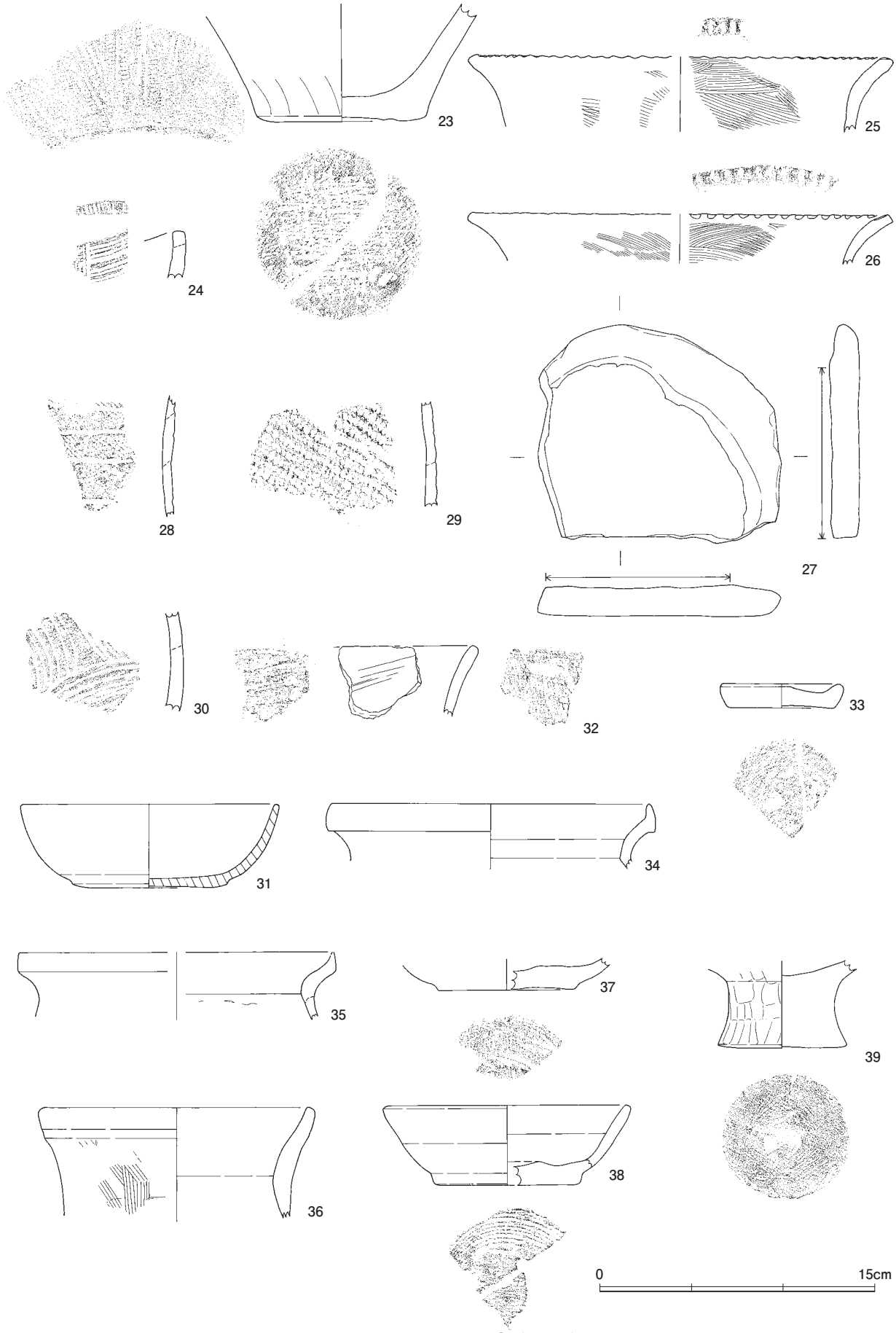
土した。

第４表　遺物観察表

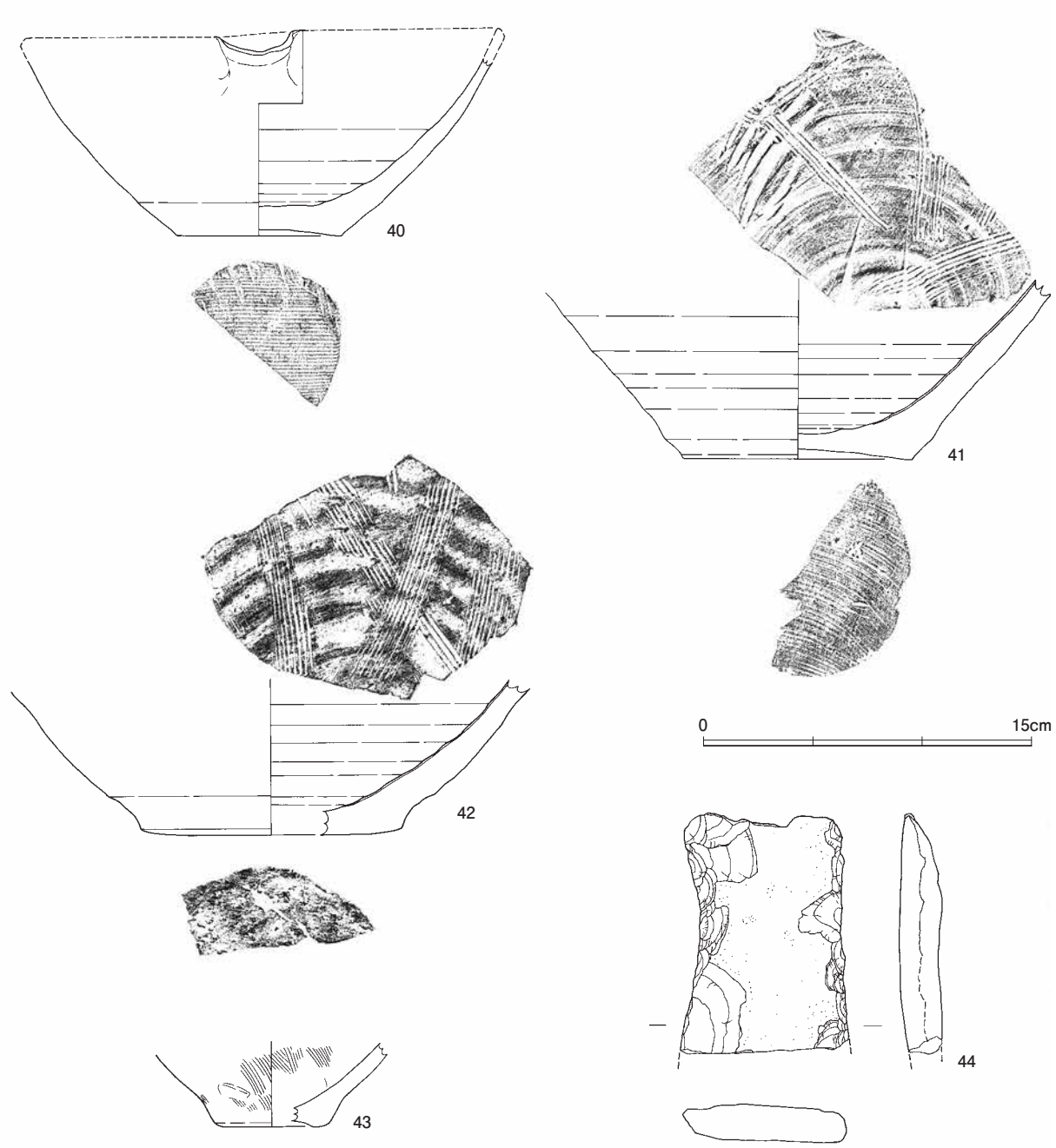
報告番号	実測番号	出土地点	種類	器種	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面
1	Ｃ－１	Ａ区ＳＫ１	土師器	甕	(21.2)	—	(4.6)	黒褐	明赤褐	粗砂多、海綿骨針	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ
2	Ｄ－１	Ａ区Ｐ１	須恵器	瓶	6.0	—	(1.7)	灰	灰	粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ
3	Ｄ－26	Ａ区包含層	青磁	椀	(14.8)	—	(2.9)	—	—	—	—	—	—
4	Ｄ－14	Ａ区包含層	土師器	柱状高台	—	6.2	5.6	浅黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂、海綿骨針	良	ナデ？	ロクロナデ
5	Ｄ－４	Ｂ区Ｐ18	縄文	鉢	—	—	(3.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ナデ	縄文、沈線文
6	Ｃ－２	Ｂ区Ｐ22	弥生	壷	—	5.4	(2.8)	黄灰	灰黄	粗砂・礫、海綿骨針	良	ハケメ	ハケメ
7	Ｄ－18	Ｂ区ＳＫ４	縄文	鉢	—	(6.2)	(5.3)	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多	良	ナデ	縄文
8	Ｃ－４	Ｂ区ＳＸ３	弥生	甕	(27.6)	—	(5.9)	灰黄	灰黄	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ
9	Ｄ－19	Ｂ区包含層	縄文	鉢	—	—	(4.1)	にぶい黄橙	灰黄	粗砂多、海綿骨針	良	ナデ	ナデ
10	Ｄ－29	Ｂ区包含層	縄文	鉢	—	—	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫、細砂多	良	ナデ	縄文、沈線文
11	Ｃ－10	Ｂ区包含層	弥生	甕	—	6.0	(4.0)	灰黄	灰黄褐	礫・粗砂	良	ナデ	ハケメ
12	Ｃ－３	Ｂ区包含層	土師器	高杯	—	—	(10.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂やや多	良	ヘラケズリ	ヘラミガキ
13	Ｄ－３	Ｂ区包含層	須恵器	蓋	(10.6)	—	(2.3)	灰白	灰	粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ
14	Ｄ－２	Ｂ区包含層	須恵器	杯	12.8	9.7	3.9	灰	灰	礫・細砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ
15	Ｄ－34	Ｂ区包含層	須恵器	杯	—	(5.7)	(2.2)	灰	灰	礫少、粗砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ
16	Ｄ－25	Ｂ区包含層	土師器	椀	—	7.0	2.0	褐灰	にぶい黄橙	礫、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ
17	Ｄ－15	Ｂ区鞍部	珠洲	片口鉢	(30.0)	—	(6.4)	灰	灰	礫・粗砂、海綿骨針	良	ロクロナデ、波状文、おろし目	ロクロナデ
18	Ｄ－16	Ｂ区包含層	珠洲	片口鉢	(30.0)	—	(5.7)	灰	灰	粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ、波状文、おろし目	ロクロナデ
19	Ｄ－７	Ｂ区包含層	珠洲	片口鉢	(18.2)	(9.2)	7.6	灰白	灰	粗砂、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ
20	Ｄ－20	Ｂ区包含層	珠洲	甕	—	—	(7.0)	灰白	灰白	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ、押捺痕	ロクロナデ、タタキ
21	Ｄ－28	Ｂ区包含層	土師器	柱状高台	—	(4.8)	(3.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多	良	ナデ？	ロクロナデ
22	Ｄ－27	Ｂ区包含層	肥前	皿	(12.8)	—	3.7	—	—	—	—	—	—
23	Ｄ－８	Ｃ区北ＳＫ６	縄文	鉢	—	9.2	(6.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	良	ナデ	縄文
24	Ｄ－17	Ｃ区北ＳＫ６	縄文	鉢	—	—	(2.6)	褐灰	灰黄褐	礫・細砂多、海綿骨針	良	ナデ	沈線文
25	Ｃ－９	Ｃ区北ＳＫ６	弥生	甕	(21.8)	—	(4.1)	灰褐	灰褐	礫、焼土粒	良	ハケメ、キザミメ	ハケメ、ナデ
26	Ｃ－６	Ｃ区北ＳＫ６	弥生	甕	(22.4)	—	(2.7)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂多	良	ハケメ、キザミメ	ハケメ
28	Ｄ－23	Ｃ区北ＳＫ５	縄文	鉢	—	—	(6.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ナデ	縄文、沈線文、ナデ
29	Ｄ－22	Ｃ区北ＳＫ７	縄文	鉢	—	—	(5.6)	浅黄	浅黄	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ナデ	縄文
30	Ｄ－６	Ｃ区北Ｐ35	縄文	鉢	—	—	(5.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂多	良	ナデ	半竹管文
32	Ｄ－30	Ｃ区北Ｐ36	縄文	鉢	—	—	(3.9)	にぶい褐	にぶい橙	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ナデ	ナデ
33	Ｄ－10	Ｃ区北Ｐ37	土師器	皿	6.2	5.8	1.3	にぶい橙	にぶい橙	礫・粗砂多、海綿骨針	良	ヨコナデ	ヨコナデ
34	Ｃ－５	Ｃ区Ｐ39	弥生	甕	17.1	—	(3.5)	浅黄	浅黄	粗砂・礫、海綿骨針	良	ヨコナデ	ヨコナデ
35	Ｃ－８	Ｃ区ＳＤ７南中央	弥生	甕	(17.0)	—	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂多	良	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ
36	Ｃ－７	Ｃ区北ＳＤ７北	弥生	壷	14.3	—	(6.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫、焼土粒	良	ヨコナデ	ハケメ
37	Ｄ－24	Ｃ区ＳＤ７南北側	土師器	椀	—	7.4	(1.7)	にぶい橙	にぶい橙	礫少、粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ
38	Ｄ－９	Ｃ区ＳＤ７南中央	土師器	椀	—	(7.8)	(4.0)	黒	にぶい黄橙	礫少、粗砂	良	ロクロナデ	ロクロナデ
39	Ｄ－11	Ｃ区北ＳＤ７北	珠洲	台付鉢	—	7.0	(4.7)	灰	灰	細砂、海綿骨針	良	ナデ	ナデ
40	Ｄ－12	Ｃ区ＳＤ７南中央	珠洲	片口鉢	—	(7.4)	9.3	灰	灰	礫・粗砂、海綿骨針	良	ロクロナデ	ロクロナデ
41	Ｄ－32	Ｃ区北ＳＤ７北	珠洲	片口鉢	—	10.3	(8.2)	灰	灰	海綿骨針	良	ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ
42	Ｄ－31	Ｃ区ＳＤ７南中央	珠洲	片口鉢	—	(11.8)	(7.0)	灰	灰	礫、粗砂多、海綿骨針	良	ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ
43	Ｄ－33	Ｃ区南包含層	弥生	壷	—	(5.2)	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂、海綿骨針	良	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ、指頭痕



第8図　出土遺物実測図①（S=1/3）



第９図　出土遺物実測図②（S=1/3）



第10図　出土遺物実測図③（S=1/3）

第６章　ま　と　め

遺跡内における集落跡の時代別分布状況を確認してまとめとしたい。

遺物を伴う遺構を中心に見ていき、時代を縄文時代、弥生時代～古墳時代前期、古墳時代中期～末期（以下、古墳時代）、奈良・平安時代、中世に分けて説明を加えていく。

縄文時代ではＢ区ＳＫ４とＰ 25、Ｃ区ＳＫ５～７とＰ 28 ～ 36 を検出した。遺物の時期は中期～後期を主体としている。ＳＫ６の上面では弥生時代中期の土器が出土している。

弥生時代～古墳時代前期ではＡ区ＳＫ１・２とＰ１～ 14 とＳＤ１～４とＳＸ１、Ｂ区Ｐ 19 ～ 24・26･27、Ｃ区Ｐ 39･40 を検出した。遺物の時期は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を主体としている。

古墳時代の遺構は確認できなかったが、包含層からその時期の遺物が少量出土している。

奈良・平安時代の遺構ではＣ区ＳＫ 10 を検出した。須恵器の蓋と有台杯が１点ずつ出土しているが小片であり、詳しいことはわからない。周辺で検出した遺構は中世のものが多く、埋土に明らかな差異も確認できなかったので、ＳＫ 10 は中世の遺構の可能性もある。なお、包含層からは奈良・平安時代の遺物が少量出土している。

中世ではＢ区Ｐ 17・18 とＳＸ３、Ｃ区ＳＫ８・９とＰ 37・38 とＳＤ７とＳＸ４を検出した。Ｃ区ＳＫ９とＳＸ４の時期を中世としたが、上面で珠洲焼が１点ずつ出土しているだけで埋土からは縄文土器が多く出土していることから、珠洲焼は混入した可能性もある。

以上の結果から以下のように①～③のまとまりを想定できる。

①　縄文時代

Ｃ区北端ではまとまった状態で縄文時代の土坑やピットを検出している。ＳＫ５・６から比較的多くの遺物が出土した。ＳＫ５からは土器や剥片が出土し、ＳＫ６からは中期～後期の土器や石皿が出土しており、生活の営みが確認できる。

②　弥生時代後期～古墳時代前期

Ａ・Ｂ区では広い範囲で弥生時代後期～古墳時代前期の土坑や溝、ピットなどを検出している。Ａ区の南端やＢ区の東半部で鞍部を検出していることから、Ａ・Ｂ区のまとまりに対応するようにして集落域が分かれていた可能性がある。

③　中　　世

Ｂ区西端とＣ区、つまり現宿集落の周縁で中世の土坑や溝、ピットを検出している。Ｂ区ＳＸ３やＣ区ＳＤ７から比較的多くの遺物が出土した。ＳＸ３から珠洲焼の甕・壺・片口鉢などが出土し、ＳＤ７からは珠洲焼の甕・壺・片口鉢・台付鉢や土師器の椀などが出土している。ＳＤ７を境にして現宿集落の方向に整地層の広がる状況がＣ区東壁で確認されており、ＳＤ７は集落域の区画を意識した溝の可能性が高い。また、ＳＤ７から中世前半の土器が出土していることから、それ以降の集落域は宿神社周辺の現集落と位置的に重なるものと考えられる。

遺構の検出には至らなかったものの、包含層から縄文時代～近世の遺物が出土していることから、本遺跡が複数時期にわたって連綿と営まれてきた集落跡であることが、今回の調査によって明らかとなった。

報告書抄録

ふ り が な	すずし　やどじんじゃまえいせき
書　　名	珠洲市　宿神社前遺跡
副　書　名	県営ほ場整備事業（宝立第２地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	谷内明央
編 集 機 関	㈶石川県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町 18 番地 1　TEL076-229-4477
発 行 機 関	石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター
発 行 年 月 日	2009 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やどじんじゃまえいせき 宿神社前遺跡	いしかわけんすず 石川県珠洲 しほうりゅうまち 市宝立町 かすがのちない 春日野地内	17205	新発見	37 度 24 分 35 秒	137 度 14 分 12 秒	20060510 ～ 20060612	420 ㎡	県営ほ場整備事業（宝立第２地区）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宿神社前遺跡	集落跡	縄文時代～中　世	土坑、溝、ピット	縄文土器、弥生土器、土師器、珠洲焼、石器	縄文時代～中世の遺構・遺物を確認した。

要　　約	遺跡は磐若川右岸の珠洲市宝立町春日地内に所在する。縄文時代～中世の遺構・遺物を確認し、縄文時代と弥生時代後期～古墳時代前期と中世の各集落跡が存在していたことが明らかとなった。また、中世以降の集落域は宿神社周辺の現集落と位置的に重なるものと考えられる。「PDF」あり。

遺跡遠景（北東から）

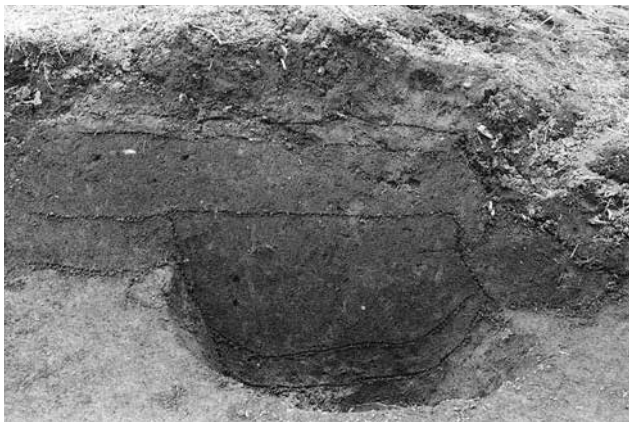
A 区北西部完掘状況（東から）

北西部完掘状況（北西から）

南部完掘状況（北から）

南部完掘状況（北東から）

北西部遺構検出状況（北西から）



SK1 土層断面

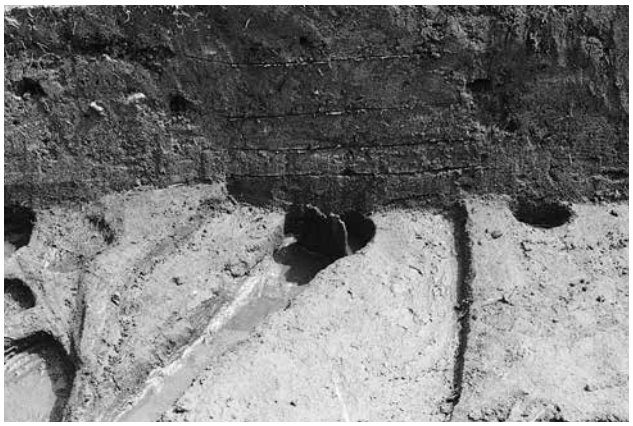
南部西壁土層断面

南部東壁土層断面

完掘状況（西から）

中央部完掘状況（北西から）

東部完掘状況（西から）



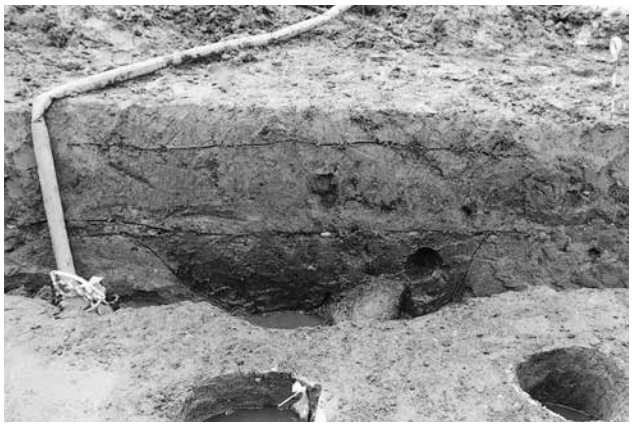
SD5

作業風景

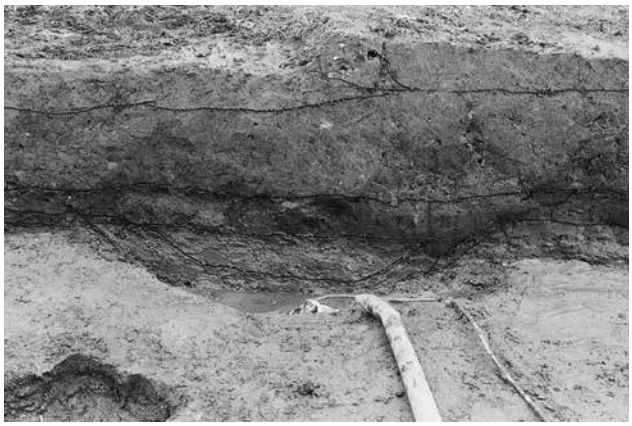
SX3 土層断面

東部鞍部土層断面

北部完掘状況（南から）



SK6 土層断面



SK7 土層断面

SK10 土層断面

SK9 土層断面

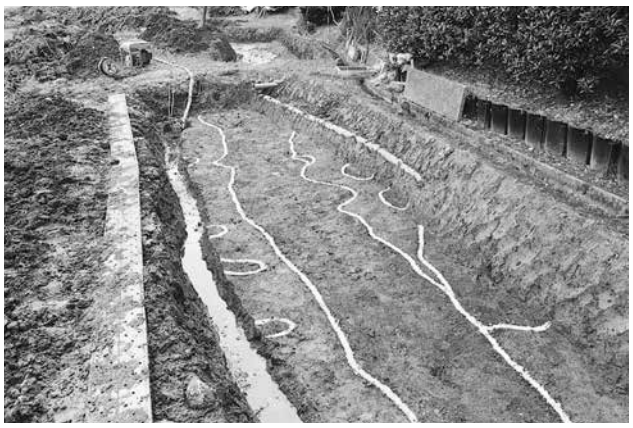
北部遺構検出状況（北から）

北部完掘状況（北から）

北部完掘状況（北東から）

北部南壁土層断面

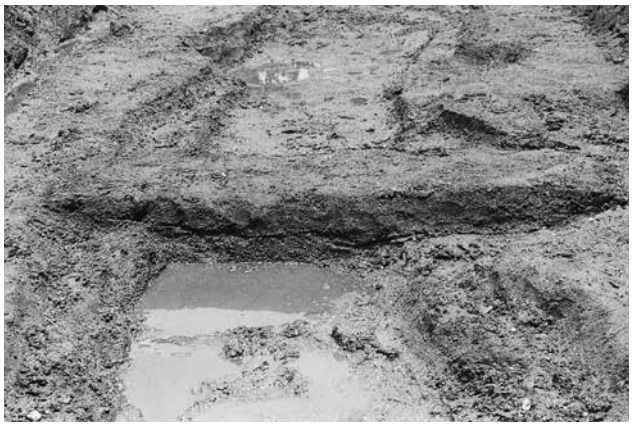
南部完掘状況（南から）



南部遺構検出状況（南西から）

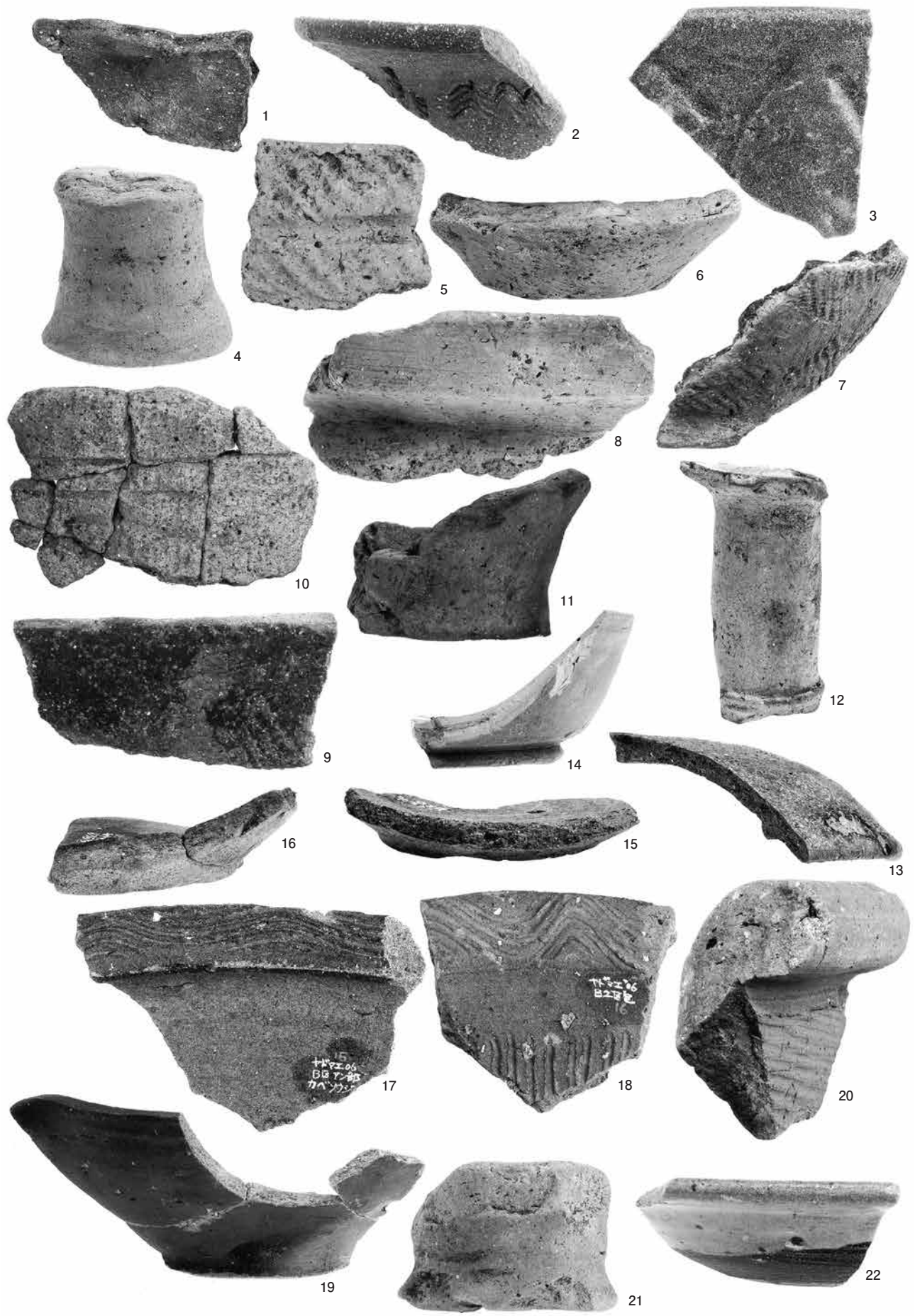
SD7 土層断面

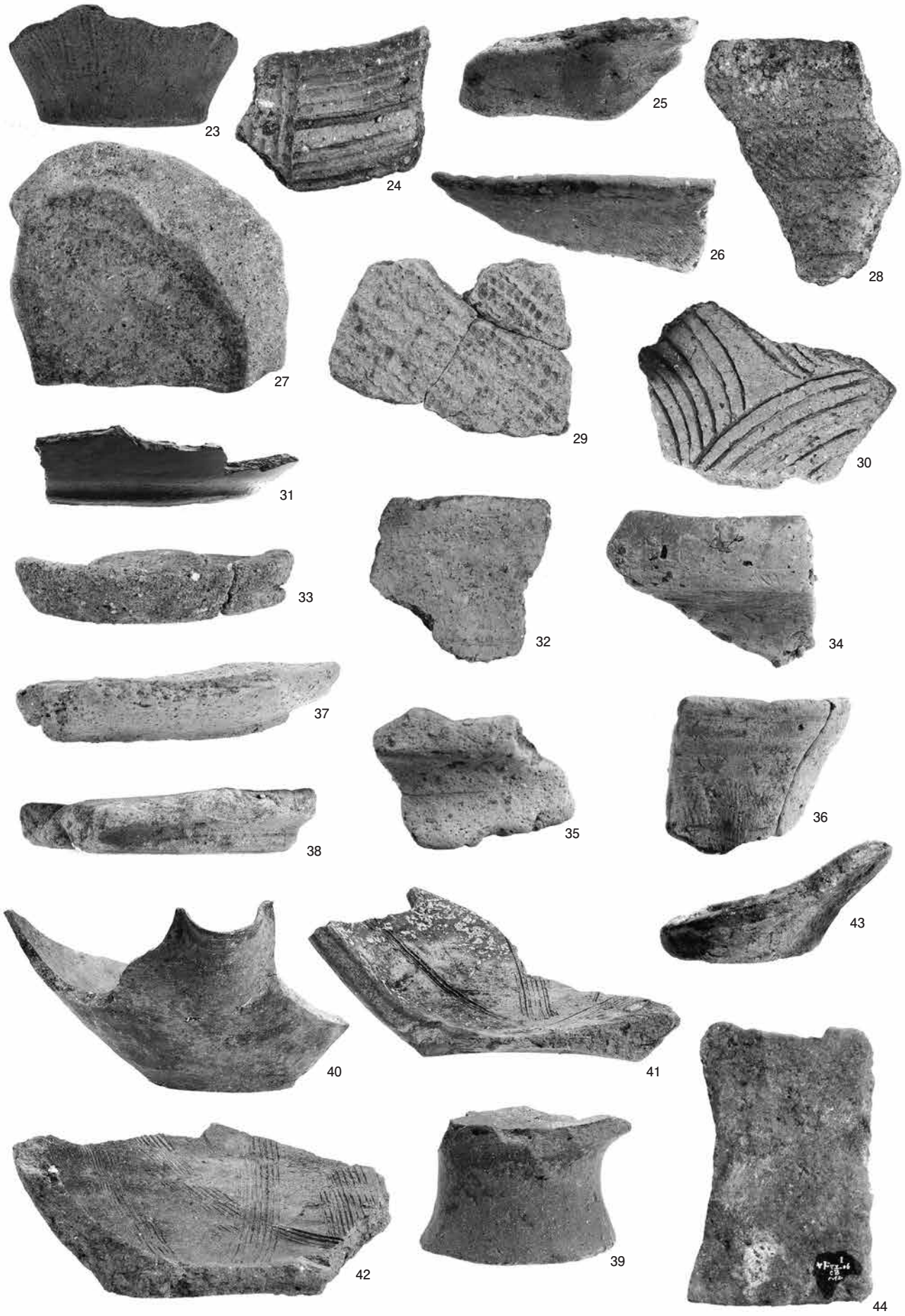
南部東壁土層断面



SD7 土層断面

南部完掘状況（東から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

珠洲市　宿神社前遺跡

発行日　平成 21（2009）年 3 月 31 日

発行者　石川県教育委員会

〒 920-8575　石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地
電話　076-225-1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336　石川県金沢市中戸町 18 番地 1
電話　076-229-4477
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　株式会社ハクイ印刷